



「わたしのことば」たち

～もしもチームビートルズが対話活動をしてみたら～

チーム・ビートルズ

まえがき

このクラスではそれぞれの興味・関心から出発し、グループ・ディスカッションを通してテーマづくりを行い、それぞれのテーマの実現をめぐる教室内外の相手と対話を行った。そして、その対話の結果をクラスで報告して意見をもらい、最終レポートにまとめ、さらにそれをグループごとの観点に基づいて編集することになった。このチーム・ビートルズは、チーム名を決める時たまたまメンバーの一人が着ていたTシャツの図柄が「BEETLES」だったということでそれを採用したという、いたってお手軽な出発であった。

活動当初メンバー6人は以下ようなことを書いている。

「他者を知ることで自分の考えも深まる、不思議な体験ができることに魅力を感じる」さき。「正解を押し付ける従来の国語教育、そんな教育体制の常識を揺さぶってみたい」まさこ。「自分にとって趣味がどのような意味を持っているのか深く掘り下げてみたい」ひろき。

「故郷浜松とそこに根付いているブラジル人、ポルトガル語を学ぶことから自分とのつながりを見出そう」ひろのり。「一生懸命自分を表現しようとするものに対し、耳を傾け理解しようとする空間をデザインしよう」チャン。「自己紹介用の趣味散歩、その散歩が自分にとってなんなのかはっきりさせたくなった」山口。

お互いを探りながら、ぎこちないやり取りで始まったグループ・ディスカッションも、それぞれがテーマを説明し、質問し質問されるうちに、薄皮が一枚ずつはがされるようにお互いが見えるようになっていった。それはテーマを決めて、そのテーマと自分との関係を記述していくことで、そのテーマを掲げたメンバーそれぞれが何をどのように見る人間かが明確になっていったということではないだろうか。そしてそれを「わたしのことば」として他者に示して対話することで、一人では得られなかった新しい何かが見え、それぞれが自分の過去・現在・未来を結ぶテーマを発見していくことになるのである。

ここに編集されたものは、対話活動を経て至った6人の主張である。

山口恵美子

目次

まえがき	i
○対話レポート	
自己との対話と他者との会話	1
	寺田早希
国語科の展望	8
	中野正子
趣味と私	16
	泉山広樹
「多文化共生」とは何か	
—ポルトガル語を学ぶ「わたし」のなかにあるもの—	24
	松本裕典
「考えにいく」教室から広がる「わたし」の世界	34
	張珍華
「自分」を整理する	47
	山口恵美子
あとがき	54

自己との対話と他者との会話

寺田早希

I. 導入

中学生になってから今まで、日記をつけることを習慣としている。毎日欠かさずつけているわけではなく、気になったこと・心に留まった言葉・悲しかったり悔しかった出来事があった時など、自分が書き留めておきたいと思った時に書くようにしている。大学に入学してからは自分のノートパソコンが手に入ったので、ここ数年はパソコンの画面上で書いているが、それまでに書き溜めた日記帳は5冊ほどだ。

中学生になって日記をつけるようになった理由は、日々の悶々とした自分の思いを言葉にして整理したいと思ったのが始まりだった。漠然とした「思い」でしかなかったものが、ノートに言葉として連ねるうちに「考え」になっていく様が面白かった。なぜそのように思ったのか、なぜあの時よりベターな行動が取れなかったのか、など自問自答しながら一日を振り返る作業は、思春期真っ盛りで世界が混沌としていた少女にとって必要なことだったのであろう。自分と対話するということを実感したのは、この習慣が身についたからであった。

それと同時に、自己との対話は必ずしも自分一人で行うものではないということに気付いた。友人達と会話しながら、自分と相手の意見や考え方を無意識のうちに比較して、「自分もそう思う」「私だったらこのように行動を執る」と必ず一度自分に立ち返って、相手の話を聞いているのである。他人と会話しながら、自分自身とも会話している。そのことに気付いたのは、大学生になって、多様なバックグラウンドを持つ人達とのコミュニケーションの機会を持つようになってからである。自分と特徴的に異なる人の例として、例えば、男子学生の存在が挙げられる。私は中高一貫女子校に通っていたので、男性と関わることは6年間ほぼなかったに等しい。しかし大学にはたくさんの男子学生が在籍し、大学生活の中でおのずから関わりも生まれる。最初は男子学生達とのコミュニケーションの取り方が分からなくて困惑したものである。しかし、段々と異性との会話に慣れてくると、彼らが女子校で同性に囲まれて育った私とは全く違う生き物で、今までのように女子校に居たら知りえなかった興味・関心事を持ち、私とは異なった視点で世界を見ていることに驚かされた。例えば、就職の話題になっても、女子はキャリアと家庭の両立を踏まえて、女性が働きやすい環境づくりがされている企業を選ぼうとするが、男性は産休や育休などの福利厚生をあまり鑑みない。そういったところにも性差が表れると感じ、世界は男女で見え方が随分違うのではないかと思った。それからは、外見のおよび内面的差異のある男女が一つの社会に存在するという事について考えるようになった。女性である自分は所属組織や社会にどう関わっていくべきなのか、どう自分の長所を活かすことができるのかなどと考えることに、自身の自己成長を感じた。「自分と異なる他人」に出会わなければ考えなかったであろう議題だったからである。

早稲田大学には各地方からそれぞれの背景を抱えた人達が多く集まる。自分が地元の小さなコミュニティで生活していたならば、一生出会うことのなかったような、自分とは全く違った考え方や意見を持った人達がいることは、私の自己成長にとってとても刺激になっている。自分の考えられる物事の範疇を超えて、新たな世界観に触れることもまた、自分との対話に繋がっていると思う。だから私は全く知らない初対面の他人と話をすることが好きだし、積極的にそのような機会のある場に参加するように心がけている。他者を知ることで自分の考えも深まる、不思議な体験ができることに魅力を感じるのである。

自己との対話と他者との会話というのは、一見相反するものであるように見えて、実は根底では繋がっている。自分と話すことも、他者と話すことも、自分を考えることと同義なのではないだろうか。それはなぜなのか、この機会にたくさんの人達と話すことによって深く追求していきたいと思う。

II. 対話活動

今回、対話に協力してもらったのは、早稲田大学政治経済学部4年I氏。サークル活動で知り合ってから3年の付き合いになる、腹を割って話せる間柄である。今回の対話活動に彼を人選した理由は、自分の考えをはっきりと口にすることができ、さらにこちらの意見にもちゃんと真摯に受け答えしてくれるからである。意図して対話相手に異性を選んだわけではなかったが、彼なら私自身思いつかなかったような答えを提示してくれるかもしれないという期待があった。

以下、対話内容。

他者との会話は自己評価の手段

寺田「以上を読んで、どう思った？」

I「俺は自分の中でしか自己分析はできないと思う。女子校を出て男子に出会った時の話をしてたけど、他人との会話で得られるのは外の世界から見た自分の評価だけだと思う。例えば、俺は音楽をやってるからそれを例にとって話すと、どんなに自分でいい曲だと思ってアピールしても、他人に聴いてもらって初めて客観的にその曲の良さだったり悪い点っていうのが見えてくる。」

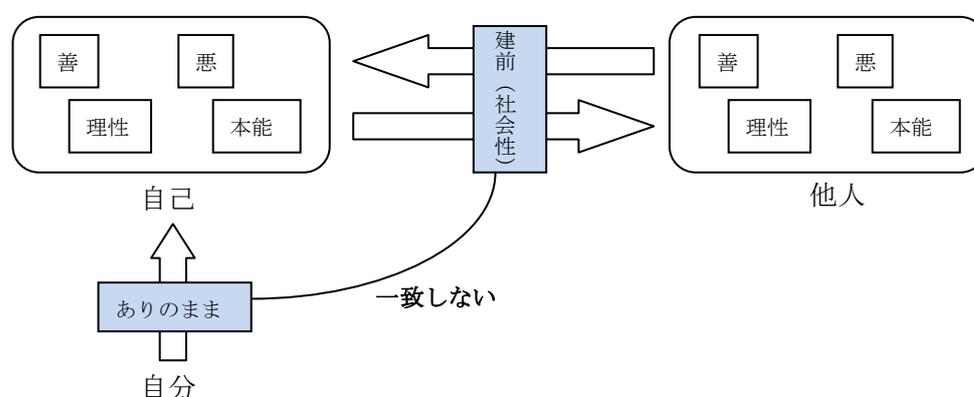
寺田「他人と話さなければ自分一人では考えなかったであろう事を考えるきっかけになるのが他者との会話だってことが私は言いたいんだけど。」

I「まず君はどういう自己との対話をしてるのか聞きたい。」

寺田「日記の中では、実際に起こったことに関して、自分の感情とか思ったことを整理するために書いてる。そうすることによって、自分の考え方を再認識することができる。そもそも自己っていうのは固定されたものではない。常に人との会話とか経験の中で組み替わっていくもの。自分はこういうものっていうのを、自分で把握しきれてない上に、どんどん変わっていく。それを把握するために日記をつけるし、自分を知るために他人と会話

する。」

I「自分と他人はそもそも“個体”が違う。だから他人との会話の中での発言がほんとにそれが本心かは分からない。個人の中には「理性」と「本能」とか「善」と「悪」とか、色々な感情というか要素がごちゃ混ぜで存在すると思うんだよね。人に物を言う時、「理性」というフィルターを通して、「建前」を意識して発言する。それに対して、自分と自己との対話っていうのは、そのまんまの自分の思いとか感情を見つめることができる。その点で、俺は他者との会話が必ずしも自己との対話で得る結果とイコールにはならないと思う。」



寺田「たしかに。でも別に他人が私に本当のことを言ってくれてるかどうかは問題じゃないと思う。自分っていうのは自分でも把握できてないものって言ったけど、他者だって把握しきれないという点で同じ。自己と他者っていうのはイコールって考えられるんじゃないかと思う。」

I「自己との対話でしたことを、他者と会話することによって、再確認できることはあるかもしれない。自己との対話っていうのは、そのまんまの正直な自分を見つめることだけど、他者との会話っていうのは理性ってフィルターを通すことによって社会性っていう部分が色濃く出ると思う。

例えば、『マジムカつく』っていう言葉遣いが気に障ったとする。それに対して、『その言葉遣いはやめたほうがいい』って注意するか、『別にいいや』って何も言わないかって、人それぞれだよ。その差っていうのは、その個人の中の「理性」だったり「本能」だったり「善悪」の秤だつたりのバランスの違いだと思う。」

寺田「それも全部ひっくるめて、『彼女は注意したけど、私だつたらしないのに』って思うこと自体が、自己との対話に繋がる気がするけど。」

I「いや、でもそれも会話を合わせるための建前かもしれないじゃん。人との対話っていうのは、圧倒的に社会性が先にくると思う。それを理解した上で、他者との会話は自己との対話に対する評価を得るための行為なんじゃないかな。」

寺田「あーmixiのイイネみたいなこと？」

I「そうそう。自分の経験に対して思ったこととか意見についてまず考えて、それを他人に話して同意を得るなり、反発されるなり、評価されるということに意味があるんじゃないかな。」

寺田「よく女の子って自分の愚痴とか黙って聞いてほしいって言う子が多いと思うけど、それも自分と対話してそこで得た答えを他者に受け入れて欲しいって言う表れなのかも。自分を正当化すること自体に意味を与えてるってことかな。」

I「そうだね。」

寺田「じゃあ他者との会話っていうのは自己との対話の評価表にしかないってことかな…。」

I「自分が思考するように、他人が思考するわけではない。しかも、他人は社会性を通して発言してくる。そうすると、自己との対話と他者との会話っていうのは全くのイコールではないと思う。」

寺田「うーん…でも、他人と会話して話題に上って初めて意識する命題とか課題ってあるじゃん。他者との会話が自己との対話のきっかけや刺激になることは少なからずあると思う。自己を見直す・捉えなおすためのインセンティブにはなるんじゃないかな。」

I「そもそも自己との対話の定義は？」

寺田「自己を捉えなおすことと、再構築するのは同時進行だと思う。だから、会話の中でガラッと意見が変わることだってある。それ自体が自己との対話なんじゃないかってことなんだけど…。」

I「自己との対話って言い方あんまり分かんない。」

寺田「対話というより、自分の思考を捉えたり、再構築するってことかな。」

I「自己を知るといってより、自己の考え方を知らせてことなんじゃ？」

寺田「自己って思考そのもののことではない。でもここで私が話したいのは、他者との会話が自分の考え方にどう影響するのかってこと。」

対話を始めて数分で、私の意図している「自己との対話」と彼の使う「自己との対話」というフレーズが、違う意味を持っていることに気づいた。それは、あらかじめ私が「自己との対話」の定義をはっきりさせないまま対話を始めてしまったからである。私の「自己との対話」は、自分の内面を見つめ直し、その結果生まれる無限の自己成長も含めた、自己分析活動のことを意味していたが、I氏が私の文章を読んで理解した「自己との対話」は、自分という人間性や人格を見つめ直すことだったようである。さらに、私たちの間には「自己」の定義にも差異があり、私が自己を「自分の人間性・思考・生き方」を含むのに対し、彼は「人格」と捉えて対話を始めてしまったことが、スムーズな理解を得られなかった原因だと考える。これは「じぶんのことば」で話すことの難しさが如実に現れた結果であろう。

客観性という共通項

I「日記を書いたり、他人の話聞いて、自分を捉え直そうとする自分っていうのは凄く客観的自分だよね。それに対して、『あの時なんでこう思ったんだろう？』って考える対象の『あの時の自分』っていうのは主観的。」

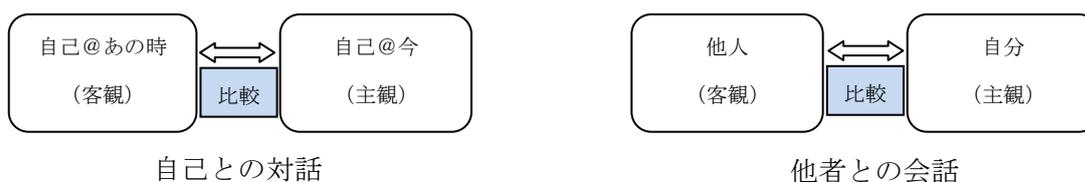
寺田「なるほど。自己との対話をしようとしている時の自分は極めて客観的である。そして他者っていうのはもちろん客観だもんね。」

I「そう。自己との対話っていうのは、主体と客体のコミュニケーションという意味で、他者との会話に通じるところはある。」

寺田「自己っていうのは一つじゃなくて二つだってことか。時系列では考えてなかった。私は把握しきれてない自己を捉える行為と、同じく把握しきれてない他者を捉える行為っていうのは一緒っていう意味で、この命題を設定してた。」

I「あー…今理解した(笑)。対話っていう言葉に囚われてた。」

寺田「いや、でも君の論理も凄く納得できた。」



【構図が一致】

ここで、私の理論を理解できないまま I 氏が自論を展開し始めた。自己との対話と他者との会話はイコールなのではないかという命題は、「自己との対話」も「他者との会話」も同じ二つの主体が「対話」する構図を取っているという点で同じなのではないか、という予想だにしていなかった新たな結論を導き出した。自己との対話を時差を含めて捉えていなかった私にとって、自己との対話は「act した時の自分」と「それを思い出し分析している今の自分」の二体があるという考え方は、全く新鮮なものであった。

彼の自論を土台に話していくうちに、彼にもようやく私のもともと考えていたことが伝わったらしく、理解し合うことができた。始めは自分の言葉で一生懸命説明してもなかなか意図が正しく伝わらなかったことも、まるでラジオの周波数を合わせるように相手の思考に沿ってチャネリングしていくと、きちんと伝えられることが分かった。

他者との会話による自己理解

寺田「この対話をしたことによって、君の中で変化はあった？」

I「それ言うと思った(笑)。まあ、この対話の流れをまとめると、寺田の考えを解体するとこから始めたけど、よく分かんないまま自分の論理を展開した。その論理と君の発言をす

り合わせることによって、君が本当に言いたかったことが理解できた。要するに、俺はめんどくさい男だなんてことを再認識した。」

寺田「は？（笑）今回のテーマについてどう思った？」

I「今後人と話す時は気にしながら会話してみようとは思えたよ。逆に君はどうだった？」

寺田「I氏が自分の論理を展開し始めた時に、『話まとまるかな』って不安になったけど、自分の提案したテーマから全く予想しなかったもう一つの結論が得られた。その過程は面白かった。」

I「自分でも自己との対話の定義ができてなかったでしょ。自分の中では理解しきってたことだったかもしれないけど、俺に伝えることはできてなかった。その曖昧だった部分をこうして対話することによって、一緒に解析できたんじゃないかな。」

寺田「自分一人で考える時って、ちょっと疑問であっても気づかずに無視してしまうこともあるってことだね。でも他者と共有しようとした時、その疑問点も解決していきなげやいけないから、理解は深まるっていう利点があるかもね。」

I「他人に対してアウトプットする過程自体が自分の考えをまとめる機会になるってことだ。だからこそ、就職活動でお互いのエントリーシートを見せ合ったりするわけだ（笑）。」

寺田「それこそ私が言いたかったことだよ。なかなか面白かった。ありがとう。」

対話活動によってこのテーマを追求していくというダブルミーニングを持たせたことに対する意味付けとして、最後にI氏に「今回の対話を通して変化はあったか」ということを質問した。先に述べたように、自分と私の理論を擦り合わせお互い理解しようと対話を進めていくことで、互いの言いたいことを理解しあえると彼も感じたようである。「じぶんのことば」で一方向的に話すことは、相互理解ではない。お互いの言語を理解しようと努めることが、相互理解への一歩であると体感することができた。

III. 結論

今回、このテーマを選んだのは、授業全体のテーマである「わたしのことば」で語るといふことと絡めたものをテーマにすれば、相乗効果で何か面白い結果が得られるかもしれないと思ったからであった。他者との会話は自己との対話になりうるかということ了他者と「わたしのことば」で会話しながら追求する。最終的には「他人と話すことによって、自分の考えをまとめる・捉え直す機会になる」という言葉がI氏自身から出たことによって、私は今回の対話の成功を確信した。他者と会話することによって自分を見つめ直し、思考の穴を潰し、正確に把握することによって、自己との対話は成立する。それこそが私がこのテーマで導き出したかった、そして確かに導き出された答えである。

IV. おわりに

本講義を受講して学んだことは、「わたしのことば」で語ることの難しさとそれを共有できた時の楽しさである。

授業はグループ内での会話主導で行われ、毎回の授業が自分とグループメンバーが主体であった。自分のテーマを探すところから始まった本講義の初回は、初対面のメンバーということできちなく始まったが、回を重ねるごとに段々と自分の発言が伝わりやすくなっていることを感じた。それは、自分が何を伝えたいか、どんなことを目標にしているかを、会話を通して互いに理解を深めていったからではないだろうか。背景を共有していることは、ことばの理解度を高める。相手がどういう人間で、どんな思考の持ち主か表面的にでも分かり始めると、ひとつの発言でもその裏の文脈も読めるようになるからである。

「わたしのことば」で語るというのは、自分の考えを自分本位に語るのではなく、同じ単語でも人それぞれに定義や意味が微妙に違うのだから、そのギャップを埋めながら、相手を気遣いながら話すということであると考え。相手に伝わることを前提に話すのではなく、相手に伝えようとする努力が双方向コミュニケーションには常に求められるのである。メンバーの話聞くことも、レポートや対話報告を読んで意見することも、自分の考えを発言することを念頭に置きながらも、「この言葉で通じるか」「こっちのワードの方がわかりやすいか」と様々に試しながら話していた。逆に相手の話がわからない時は素直に説明を求めることができた。これは、メンバー全員が「わたしのことばで語る」ことを意識した言語活動ができていたからではないだろうか。

「わたしのことば」で語る言語活動の練習を授業で毎週繰り返し行うことで、本レポートのための対話活動もスムーズに行うことができた。対話相手は、お互いの背景の大部分を共有した付き合いの長い友人だったが、それでもこちらの言葉が通じず、対話の途中まで苦勞した。しかし、相手の考えと私の考えがお互いに理解できた時、思わず「あー！そういうことか！」とピタッとパズルのピースが合ったような、気持ちのいい感覚がとても嬉しかった。「わたしのことば」と「あなたのことば」がひとつの共通の言葉を手に入れた瞬間の喜びは、言語活動の醍醐味であると感じた。

私は、他人と会話する時はいつもラジオの周波数を合わせる感覚で、チャンネルを回して、こう投げたらどう返ってくるか、この言葉ではどう反応するか、と言葉を試しながら話す。そこから見えてくる人間性や思考に触れる度、自分は果たしてどうだろうか、と自己確認をする。その都度、新しい自分を発見することができるから、初対面の人でも旧知の知人でも、どんなくだらない話題でも会話することが好きなのである。例えば、自分探しの旅、などという言葉があるが、一人で自転車で日本一周したところで、「本当の自分」などというものは見つけられるはずがない。「本当の自分」などというものはそもそも存在しないし、独りになったところで、他者という比較対象がなければ自己を捉えることはできないからである。自己は常に人との出会いやコミュニケーションの中で育ち、組み変わっていく。自己との対話は他者との会話の中でこそ実現することができるのである。

国語科の展望

中野正子

動機

「学校の勉強がつまらない。なんで勉強しなきゃいけないの。」と春休みに知り合いの中学生の女の子から聞かれた。彼女が納得するような言葉はかけてあげられなかった。それはまさに自分が昔よく言っていた言葉の一つだった。

例えば国語科を挙げると、幼いころから言葉を知ることや本を読むことは時間を忘れて夢中になるくらい好きであった。しかし、高校までの国語科の授業や受験勉強はあまり好きになれなかった。理由は暗記が非常に多いことや誰かの解釈を押し付けられる感じがしてそれに反発していたからだ。また、目の前の勉強と現実の生活とが結びつかず勉強の世界が虚構に思えた。先生に不満があるのではなく（むしろお世話になり感謝している）、自分の考え方に固執していた。

現在卒業後に教育分野に携わることを志望している。この先どのような人物（主に教員）になりたいかと聞かれたときに「生徒のやる気のエンジンをかけるような教師（人）になりたい」と答えている。勉強や活動を上から押しつけるのではなく、生徒のやる気のエンジンがかかる部分（動機）を探し出し、それを肯定して伸ばすことだ。エンジンがかかれば周りが驚くほど自分の力でアクセルを踏んで伸びていく。その事実を近所の教育研究所でボランティアをしていたときにそんな子どもの姿を何度か目の当たりにした。

自分自身のエンジンがかかったのは遅い方かもしれない。高校卒業後、某大学に入学した。しかし事情があって半年で自主退学をした。退学後は早く働きたいと思いフリーターをやりながら職を探した。しかし毎日仕事をしながら勉強不足を嫌というほど痛感した。もっと勉強したいという気持ちが自然と湧いてきた。そこで働きながら予備校に通うことにした。前に嫌々勉強していた時より何倍も吸収する力が違い、何時間勉強しても苦痛ではなくなった。このように自分で勉強必要と気づいてからエンジンがかかった。自分でも変わった実感から、次は他の人にその人に合ったエンジンをかける手伝いができたらと考えている。

また昨年本学で受けた中の授業の一つで今まで疑問に思っていた教育への考えに対して解決の糸口が見つかるような体験をした。それは国語という科目について考える授業であったが、同時に今の教育の体制についても考える授業だった。既存の教育体制である＜教える・与える＞ではなく、＜学ぶ・考える・育てる＞方向で高校において何十年も前から国語の授業を実践してきた先生の話は自分にとって刺激的な内容だった。

反省点としてこの授業で自分にとって新しい考え方・視点に何度も触れ、それに驚き感動するばかりでまだその授業の考え方を消化しきれていない。今回改めてこの授業について振り返りより深めたい。

対話

対話したのは、昨年度筆者が刺激を受けた同じ授業を受けていた方である。本学文系学部2年の学生である。選んだ理由は討論をしたときに問題意識が共通していたことや他人の話の要約がうまく話の進行が優れていると感じていたからである。また20人ほどいた受講生の中で大多数が今まで受けてきた国語の授業を何かしら批判していたのに対し、自分の受けてきた授業をほとんど批判することがなかった点で印象に残っていた。むしろ授業に満足しているとの話を聞きそれはなぜなのか今回の対話で明らかにしたい。

日時：2011年6月24日（金）10：30～12：30

場所：文学部カフェと Café Letro

なお S は対話相手、私は筆者である。またキーワードになりうる文章には意図的に下線をつけた。

I 「国語＝道徳的」に違和感

私：去年の授業を一緒に受講していたときにほとんどの受講者が自分の受けてきた国語の授業を批判していたよね。なぜ批判する気にならなかった？

S：国語の授業がよくないという話を周りの受講者から聞いたんだけど、そういうのがよくわからなかったんだよね。様子を体験してないのがあるから。

私：学校は私学？

S：そう。私立の中高一貫校。ちなみに小学校は公立で、でも、小学校の時の国語の授業はあまり覚えていないかな。

私：私も記憶が薄いな。

S：覚えてないけれど、やっぱりかなり道徳的だったなというのはあるなあ。扱う話がいわゆる道徳の意図が見えるな—というの子どもながらに思うよね。

私：国語って結構道徳に近いよね…。

S：うん。その部分は結構大きいと思う。

II 先生は自由な人だった

私：それで、中学に入って…。

S：うん。学習指導要領ってあるじゃない？あれを多分あまり気にしてなかったんじゃないかなと思うんだよね。

私：へえ。

S：私学だったし。この先生の言うことをやっていたら力になるんじゃないかなという盲目的な考えに従ってやってはいたよね。教科書にたまにふれていただけ、わりと自由な感じでやって。それが逆に体系だっけなように見えたから、「これじゃ力つかないよ」という意見が学年の中でも大きかったんだよ。自分はそんなことないと思うんだけど。

私：教科書以外のことというと？

S：ディベートをやった。議題は年賀状は必要か否かとか（笑）。高2で。二か月くらいやった。

私：二か月も？！

S：うん（笑）。二か月は長かったと思う。

——上記の会話から小学校時代は道徳的な押し付けを感じていたのに対し、中高一貫校では自由な感じでやっている先生がいたという。しかし、その自由さは賛否両論あったようだ。ではその自由な感じとはどこから来るものなのだろうか。補足すると S さんが挙げる自由な先生とは30代半ばの女性の先生である。結果的に現代文、古文、漢文の科目は入れ替わったものの中高の6年間を受け持ってくれたという。

Ⅲ 丸暗記＝一方的な押し付け

私：古文漢文ってどうしても暗記になってしまうよね。

S：うん。古文や漢文の授業は単なる丸暗記と思わせないように意識を引っ張っていくことができるといいよね。そういう点では教師の技量だよ。暗記すればいいというだけなら文法書渡して「これです」って言えばいいじゃん（笑）。

私：たしかに先生いないよね。

S：そう。教師は結局のところ生徒の暗記のサポートにはなっちゃうけれど、もっと高いところに意識を持っていける授業がレベル高いんじゃないかな。現在まで残されてきている文学、内容の味わいとかそれは今でもよく自分も分からないけれど…。それを嫌みのない、「これはいいものなんだよ」という教師的な目線ではなく、さりげなくっていうのを求めているな。

私：その自由だった先生は？

S：上から目線じゃなかった。フリーダムな人で。教科書をあまり使わない人だったかな。

私：国語なのに教科書を使わないんだ？先生のキャラクターはどうだった？

S：感情がすぐ出ちゃうタイプだったね。真面目な人で生徒からの悪口も真に受けてて。

——ここで自由な感じの具体的な部分が浮かび上がってきた。Sさんの会話の「上から目線ではなかった」というところから自由だったと称される教師からの押し付けを感じていないところがうかがえる。しかし、この自由さも問題があるようだ。

Ⅳ 受験に役立たないジレンマ

S：高2になると、みんな「受験、受験」って言い出して。「こいつの授業は受験っぽくない」と言われ始めて。自分がよいと思っていたその自由な先生は人気なかった。

私：そこが難しいところだよ。結局受験に結び付かないと、悪い授業だと…。

S：そう。授業の価値を見出してもらえない。

私：うーん。

S：やっぱり受験に価値が寄っちゃうじゃん。みんな。

私：受験前になるとね…。合格しないっていう…。

S：そうそう。

私：その先生は受験テクニク的なことはやってた？

S：一応頑張ってたね。高3の時は、センター演習で要約をやった。

私：要約か…。

S：それ以外もあったと思うけれど結局、小手先の技術やテクニカルな部分はたしかに身につくけれど、記憶には残らないな。

私：うん。小手先のテクニクだけうまい先生がいても最初は“おっ”ってなるけれど、あとで思い出す先生って不器用でも熱意が伝わってきた人が多い気がする。

S：それはあるね。

——自由な取り組みを授業で行っていても、受験に結びつかなければ価値を見出してもらえないジレンマが存在すると分かった。特に受験学年が近づくにつれ、その傾向は顕著なようだ。しかし受験テクニクはあくまで受験で点数を稼ぐための手段であり、それ自体に感動するような記憶は残らないと確認できた。また熱意が伝わってくる先生が記憶に残るという意見が一致した。しかし、この熱意というものも曲者かもしれないことが次の対話から分かる。

V 熱意をどう伝えるか

私：やっぱり熱意がある先生に教わりたいな。その教科を好きでたまらない感じの先生を見ているだけでこちらも楽しくなる気がする。嫌々やっている人よりも。

S：そうだね…。そこなんだよ、難しいのは。例えば“これを教えたい”という教材が好きだった時に“好きだ”っていうのを前面に押し出して強調しちゃうと駄目なんだと思う。

私：うん？

S：強調すべきなのは自分のその好みじゃなくてその作品の内容であつたり。だって自分が好きだってことは二の次じゃん。それを生徒が受け取ってどうするか、生徒にどうやって与えていくかということが大事なのに「これ大好きなんですよ」って延々とと言われても学習者は「はあ…。」となるから…。

私：うん。うん。

S：先生の熱意とそれを生徒に伝える際にうまい具合に気をつけるというか。

私：伝え方…。

S：そうそう。好みの押し付けにならないように…。国語だったら、例えばある文学作品が大好きでそれを生徒に読んで考えて欲しいという場合、むしろ“好き”っていうのをあんまり出さないほうがいいんだと思う。「これすごくいいから」って出されたとき、“あ、熱いな”ってなるじゃん。

私：たしかに…。

S：昔そういうことがあって、あーちょっとこの人熱苦しいなって思っちゃって。

私：わかる。熱すぎる熱血教師苦手だった…。

S：なんかね。それは悪い事じゃないし。そこでうまい具合に生徒を惹きつけるというか興味を持たせるという時にどうするかって話なんだよね。

私：うーん。

S：例えば…。あつ、ほらブックトークあるじゃん。

私：ああ～。(対話相手と自分は今年度司書教諭の同じ授業を受講している。そこで毎回受講者から三人ずつ自分の紹介したい作品を挙げて5分間ブックトークをしている。)

S：あのときも思ったのだけど。淡々と内容を解説してくれるタイプのブックトークと、「これすごく好きなんですよ」っていうのが見えるタイプがあったじゃん。

私：うん。うん。

S：で、思ったときに。どっちがいいかなっていうと。なんか淡々と内容をやってくれる方が本の紹介には適しているんじゃないかなって。

私：ああ。無理やり強調するんじゃなくて。

S：そうそう。例えば、「〇〇」をやった人とか。

私：ああ～。あれ落ち着いてたね。

S：そう落ち着いていた。ほぼ内容説明に徹してたじゃん。

私：なるほど。

S：そこなんだよね。

私：うん。熱意があることは大事なことだけれど、押しつけられるときついよね。全く興味がなくてこちらがついていけないのに一方的にぐいぐい来られると引いちゃうこともあったな。心に熱いものは持ってるんだけど、冷静さが必要ってうか。静かに…。

S：そうなんだよね…。どうもね。その差。どう(熱意)を出していけばいいんだろうかね。

——熱意があることは必要であるが、それを押し付けることは抵抗を感じるという意見で一致した。熱意の伝え方に工夫が必要なようだ。

VI 現在の趣味のきっかけは国語の教師

私：そういえば短歌を趣味にするきっかけはその自由な先生の影響？

S：そうなんだよ、実は。詩とかを月に3つくらいずつ授業で紹介する人で、その中で短歌も紹介してくれて。その時は「ああこんなものもあるのね～くらいだったけれど、のち受験期に図書館へ現実逃避に行つて短歌の本を見つけて、ああ短歌ってこんな風の本になってると思って。そういう点では感謝してる。

私：おお～。

S：国語力に関係あるかは別としてさ、国語の時間って先生が扱ったものと生徒との出会いの場になるじゃない？それはかなりいいことだと思う。小説もそうだし。

私：小説も？

S：山月記とか授業でやったよね。あれを読んで中島敦を文学全集の中の作品を読んだ。だから機会を与えられるっていう点では大きかったかな。

——ここから教師が授業内で短歌の紹介したことから後にそれが趣味になったことが分かった。この例のように教師が授業で取り扱うものは生徒にとってその作品との出会いの場になると分かる。そして時にはそれが後の趣味や人生の行動につながることもあるのだ。次は授業形態について考えていく。

VII やってる感じがね

私：授業は教師が生徒に押し付けるんじゃなくて生徒と一緒に創っていくとかそういう感じに持っていけないと満足しないというか…。

S：飽きが来るしね。自分がやってる感がねと面白くないんだよね。

私：参加してる感じがね。

S：数学だったら演習とか交えながら今自分がやっている認識がついてくるじゃん。でも国語って一部は暗記ではあるけれども授業の進行と同時に覚えていけることじゃないからさ。だから“やっている感”がどうしても少なくなっちゃって眠いし、ね。

私：そうだね。それに国語の存在意義というか。あえてなぜ時間をとってこの教材をやっているのかを生徒に示してくれたらもっと目的意識持てるかもな。

S：そうなんだよね。

私：今の国語の授業だと、先生はずっとしゃべっていて先生の言語活動にはなっているけれども、生徒はシーンとしているから。学習者の一部だけ指名されて答えてその他大勢は一言もしゃべらずに授業が終わるときもあるし。

S：そう。学習者のアウトプットがない…。

私：まず授業内で生徒全員が一言以上は話すか書く時間が欲しいよね。しかも話したり書く内容は先生があらかじめ作った問題の答えじゃなくて自分の意見を表現する場を作った方が満足すると思う。あとはこの作品をやっている意味とか、応用できることを教えて欲しい。

S：その教材をやる説得力が国語って足りないんだよね。説得力がなかったら生徒を勉強にむけることは難しいし、自分でこういう理由でこの作品をやっているというのを生徒に示せなかったら何でやってるのという話に自分でもなるし、生徒はもつとなるし。

——国語は他の科目に比べ授業のやり方を工夫したり意識をしないと学習者自身がやっている感じや自分の力になる感覚が少ない特性があると考えます。Sさんが挙げた数学では問題演習をやるうちに自分が解けるようになる感覚がつかめる。また社会では物事を暗記して流れを言えるようになればテストの点数が取れるようになるなど指標がつかみやすい。それでは国語においても実感がもてるように何か方法はないのだろうか。そこでSさんは「アウトプットが少ない」という指摘をした。これは今年の授業でもかなり意見

が出た。国語科におけるアウトプットの方法とは具体的にいうと、自分の意見を書いたり話すことが挙げられる。

VIII アウトプットの時間が必要

S：去年の授業で現在の国語教育はインプットが多くてアウトプットが少ないからアウトプットの時間をもう少し増やしたほうがいいって話に散々だったよね。それなのに、去年の授業をアウトプットする時間はなかったかなって（笑）。

私：そうか。そういう意味でこの対話もあの授業のアウトプットになったかな？（笑）。

S：うん。こういう感じであの受講者でまた集まってあの授業を振り返りたいね。

私：そうだね。また集まりたいな。今日はありがとう。

S：こちらこそ楽しかった。ありがとう。

——昨年度の授業の中で多くの人が国語教育でアウトプットの時間を増やそうという意見を出していたのにもかかわらず、その授業自体のアウトプットの不足に二人で気がついた。もちろんその授業では多めにアウトプットの時間は設けられていたと考えるが、改めて時間が経ってから振り返るとより内容を深められると今回の対話から感じる事ができた。

結論

今回の対話から自分と対話相手が現時点で求めている国語の授業の像がより明確になった。またなぜ対話相手が受けてきた国語の授業に満足していたかが分かった。結果、自分が生徒にエンジンをかけたいと考えていた理由が分かった。

<教師>と<生徒>の関係について

現在の国語教育において主に四点の指摘があった。一点目に<教師>から<生徒>への一方的な押し付けが挙げられる。押し付ける内容として教材、道徳的規範、熱意が挙げられた。いずれも伝え方に工夫が必要だと結論付けられた。また学習者のアウトプットの時間が足りないことが挙げられた。二点目に学習者にとって<教師>から<生徒>への“上から目線”での対応に違和感があることである。教師が上から目線で与える感じを出すのではなく、さりげなく提案すると学習者に受け入れやすいのではと考えた。そして発問は答えがもともと教師の中にあってそれ以外認められない雰囲気を出さず生徒自身が問題や答えに気づくことが望ましい。

また、三点目に受験勉強との兼ね合いがある。受験のテクニックは受験に役立つが記憶には残らないという意見が出た。しかし現時点での受験体制（主に一般入試）に対応するためには必要である。四点目に国語の授業は出会いの場であることだ。定期試験や受験の点数の向上とは直接関係ないが、教科に感動とか人生を豊かにするなどの要素を加えることである。

以上のことから今回の対話での理想の国語の授業とは<教師>⇄<生徒>が双方向のや

りとりをし、教師>優位の“上から目線”をやめ、ある程度受験勉強にも対応しかつ受験と直接結びつかないが感動や人生を豊かにする出会いの場とするものが求められているのではないかという結論に達した。

対話相手が中高時代の国語の授業に満足している理由は二点あると考える。教師が“上から目線”を感じさせなかったことと、短歌という趣味を広げる機会を与えてくれたことである。今回の対話からその二点によって対話相手は満足していると推測される。

エンジンをかける＝自分で気づくこと

自分が嫌いだっただ勉強を途中から懸命にやった理由は、勉強が必要だと自分で気づいたからだ。それまで第三者から「勉強は社会に出てから必要だよ」だと何度聞かされてもやる気がおきなかった。それは自分以外からの“上から目線”の押し付けだからだ。同じ「勉強は必要」という考え方で自分の中から自発的に出てきたものと周りからの押し付けたものとは捉え方や取り組み方に差が出るのである。

以上のことから何かを押し付ける人ではなく、学習者自身に問いや答えを気づかせる教師（人）になりたい。それを意識した授業づくりがしたい。私にとって理想の教師とは何かを教える人ではなく、気づかせる行為をする人を指すのだと分かった。先の例で出した中学生の女の子には自分の考えを押しつけるのはやめ、自分で勉強が大事だと気づく（もしくは勉強以外の道もある）ことができたと思う。その手伝いの方法をこれから模索していきたい。

おわりに

今回の対話活動では授業での対話活動、BBS、対話相手との対話活動の三つの活動を行った。授業内での対話は、ほかの受講生にレポートを見せる行為が初めてであり、質問してもらえたことでわかりやすい文章になっていった。

BBS では文章から言いたいことが「伝わった」との意見が複数あり、とても達成感を感じた。それによってより伝わりやすい言葉を探そうと推敲する気持ちが出てきた。他人の文章を読む機会も今までなかったが、読んで何か質問することはより理解しようとする気持ちが出てきた。対話相手との対話では対話前に筆者の動機文を読んでもらっていたのでスムーズに話が進むことができた。目的となぜ対話相手に選んだかを事前に伝えていたことも相手に対話を承諾してもらえることにつながったのかと考えている。

すべての活動を通じて活動前と活動後と比較してみると、自分の意識が変わったと考える。活動前は人に伝わりづらい表現が多かった文章も班のメンバーからの意見によってよりわかりやすい文章を心がけるようになった。また、伝わるのがこんなにも達成感があるのかということが分かった。他人のテーマのことについても意見することは自分の戒めにもなった。同じ内容であるのにもかかわらず推敲を重ね変化していったことが確認できた。同じテーマを多様な形態でアプローチし深めることができた経験となった。

○動機文

テーマを選択した理由だが、初めは自分の過去・現在・未来をつなぐテーマと聞いて、何か壮大なテーマを掲げなければならないのかと思い、選択にとっても苦労した。しかし、純粹にこれまで自分が何をしてきたのかを考え、なるべく自分と馴染みの深いテーマで、かつ様々な人と議論の出来るようなテーマを選択しようと思った。

自分がこれまで一体何をしてきたのかと考えると、自分の場合は一番に思い浮かぶのが趣味であった。中でも一番熱中していると言えるものは、サッカーと音楽で、大学生活では授業やアルバイトを除くと殆どの時間をこれら2つの趣味に費やしてきましたのではないかと思う。

まずはサッカーについて、私は小・中学校とそれぞれ地元のクラブチームと部活動に所属していた。高校では受験勉強のためサッカー部には入らなかったのだが、休日には友人と公園に集まり、よく草サッカーをしていた。またサッカー観戦もとても好きで、日本代表や自分が応援するチームの試合は毎試合欠かすことなく見るようにしている。そして実際にスタジアムに足を運ぶ事も楽しみの一つである。

次に音楽について、大学では音楽鑑賞サークルに所属しており、そこではサークルの仲間と部室で音楽を聴いたり、好きなアーティストのライブなどにもよく行ったりした。ここでは様々な人が所属しており、音楽の好みも皆それぞれ多岐に渡っていたので、サークル活動を通じて、様々な音楽を知ることが出来たと思う。

また、私にとって「趣味」とは様々な事柄を知るキッカケでもあったと思う。例えば、サッカーを通じて様々な国の文化や社会的背景なども知ることが出来たし、最近では韓国の文化に対して興味があるのだが、これはK-POPを聴いていたことが動機であった。このように、趣味は自分の知識を増やしたり、視野を広げるためにとても役立ったのではないかと思う。

また、多くの人と同じように、私も自分が好きなことに関わる仕事をやってみたいと考えることがあった。しかし、自分の場合はそう考えることはあっても、実際に何か行動に移すという事は特に無かったように思う。したがって、実際にそうした人達に比べて、好きなものにかかる情熱が少なかったのかもしれない。これは、自分でも少し後悔している点でもある。あるいは、趣味と仕事は違うものと感じて、あくまでもリラックスした状態でそれに付き合っていきたいと無意識のうちに考えていたのではと後になって思うこともある。

以上のように、私にとって「趣味」とは欠かすことの出来ないモノであり、特にそれを介して様々な人と出会う事が出来たのはとてもよかったと思う。また、就職してからもこれらの趣味とは一生付き合っていきたいし、さらには今後他の新しい趣味を発見し、自分

の興味や関心をさらに広げることが出来たらとも思っている。

したがって、私はこの授業を通して、普段あまり意識することのなかった「趣味」が自分に対して持つ意味を深く掘り下げて行きたいと思う。また、対話活動の中で、他の人にとって趣味が意味するものとは何か、また、それを好きになったキッカケやどういう点に熱中しているか、さらには好きなことを仕事にすること、などについて聞いてみたいと思っている。

○対話活動

対話相手には、大学の語学のクラスが一緒に、一年の頃からの友人である S 君を選んだ。その理由は、彼は大学入学時からずっと合気道サークルに所属しており、副主将も務めていたので、当然合気道に懸ける情熱も相当のものであったと思い、趣味と私というテーマで対話を行うにはぴったりの人物だと考えたからである。また、彼も自分と同じ様にサッカーが好きで、他にもスポーツ全般に詳しく、非常に多趣味という印象も持っていたので、その点においてもこのテーマを考える上でも一度話を聞いてみたいという人物であった。

—熱中していることと、それを始めたキッカケ、そしてその魅力

私：今熱中してることってある？

S 君：野球とサッカーかな。今アルバイトで中継の仕事をしてるから。

私：中継のアルバイトはどういうところが楽しい？

S：今までなかった発信する側の視点に立てることかな。

私：というと？

S：視聴者からの反応があるところが楽しい。何かミスをしたらすぐクレームがくるし、新しい企画に対して反応がすぐにもらえる。

私：そっか。アルバイトではある程度自分でやりたいことができる？

S：うん。でもそこまで来るのに5年かかった。だからこそ今が面白い。

私：じゃあ、今の趣味は野球とサッカーでいいのかな？

S：まあ、スポーツ全般が好きなんだけどね。(笑)

私：サークルで合気道をやってるって聞いたけど、どう？すごく厳しいみたいだけど。

S：確かに名前はサークルだけど、部活みたいに厳しいよ。

私：どういうところが厳しかった？

S：単純な練習量だったり、上下関係や礼儀。武道って基本的に厳しいイメージがあるけど、そういうイメージのままだった。(笑)

私：それでも続けられたのはどうして？

S：やっぱそれは仲間の存在が大きいかな。

私：例えば？

S：武道って基本的に精神的な世界を重んじていて、自分との戦いが重要。わが道を行くという孤独な世界なんだけど、それでもやっぱ一緒に同じ空間で同じ道に進む中で厳しさを共有できるし、その中で仲間意識が芽生えてくる。

私：自分の場合は遊びの中でスポーツの面白さに気がついたと思う。中学の時はサッカー部だったんだけど、サッカーが心の底から面白いと思ったのは高校の時に部活ではなくて遊びで友達とボールを蹴ってた時だったんだよね。

S：中学校の部活って、やらされている感があるよね。選択において周りに流されてたりすることが多いと思う。

私：なるほど。もし先に遊びを通じてサッカーを好きになって、部活動も自分で進んで選択してれば、もっと楽しく過ごせたのかもしれない。

S：というよりも、サッカーに対しての見方が分かってきたからかもしれないね。心身ともに成長して。

私：話はもどるけど、合気道自体に魅力は感じた？

S：どの段階で？

私：じゃあ、まずは始める段階で。キッカケということ。

S：正直、合気道自体に興味はなかった。(笑)

私：じゃあどうしてはじめての？友達の影響とか？

S：というよりは、小・中・高と競技スポーツをやってきて、大学に入っているいろんなサークルの新歓を回ってて、合気道の「競わずに自己研鑽」というフレーズに惹かれた。

私：なんでそのフレーズに惹かれたの？

S：今まで、スポーツと受験を経験して、競争に疲れた。(笑) どうせ社会に出たら、競争しなくちゃならないから、大学くらいはそういうことをやってみたいと思った。

私：なるほど。

S：逆に聞くけど、なぜ音楽サークルに入ろうと思ったの。

私：単純に音楽が好きだからっていう理由でサークルに入ったんだけど、何回か参加するうちに、サークルを通じて自分が聞いたことのない新しい音楽を知ることができて、それが楽しくなったからかな。

S：なるほど。新しいことを発見するっていうのは面白いよね。

私：例えば、サークルを通じて、世界中の音楽を好きになったんだけど、そこから発展して、その国の文化や社会に興味を持ったりして、世界観が広がったような気がする。S君はこういう「趣味」を通じて、自分の視野とかが広がったっていう経験はある？

S：スポーツをやってて共通の趣味を持った友達と出会える。スポーツって万国共通だから、ほかの国の人とも、「趣味」を通じて話すこともできる。そして、その人を知ることができて、自分の視野も広がると思う。

私：確かにそうだね。初対面の人とも「趣味」をきっかけに話が広がることもあるし。友

達と自分が好きなことを共有できるのはとても良いことだと思う。

S：趣味を話すことはその人のバックボーンを知ることにもなるし、趣味って一種のコミュニケーションツールだと思う。

私：そうだね。

まず、S君は合気道の魅力として具体的に①「競わずに自己研鑽」、②「仲間の存在」ということを挙げてくれた。これは対話を振り返ってから気が付いたのだが、「趣味」の魅力には2つの側面があると思う。1つめは①のような趣味そのものの魅力で、2つ目は②のような趣味に付随して生じる魅力である。意外に思ったことは、私も対話相手も、後者の魅力を第一に挙げていた点である。仲間の存在や自分の視野が広がることなど、趣味を持つほとんどの人が同じような魅力を感じている事と思う。しかし、自分にとってサッカーや音楽が他のものと代替不可能であるのは、やはり前者の魅力も少なからず影響しているからであると思う。したがってこの点については今後考えてみたいと思う。

—「趣味」を仕事にするという事

私：自分が好きなことを仕事にしたいって思ったことってある。

S：もちろんあるよ。特に子供のころの夢っていうのはその延長なんじゃないかな。

私：大学の間では？

S：やってみたいって思ったことはあるけど、怖いよね。基本的に趣味はお金にならないから。

私：でも稼げる分野もあるんじゃない？

S：あると思うけど、そこを趣味にしてる人って少ないと思う。

私：僕も好きなことを仕事にしたいって思ったことはあるけど、そういう仕事って競争が凄く高いから、最初からできないって思って諦めてたかもしれない。

S：安定した仕事じゃないし、リスクが多いかもね。日本の教育システムって不安定なものや不確かなものにたいする恐怖を刷り込んでる節はあるよね。

私：確かにそうかもね。さっき、スポーツ中継のアルバイトの話をしてたけど、それを仕事にしたいと思わなかった？

S：思わなかったね。

私：それはどうして？

S：中継の仕事って、リスクっていう面ではそんなに高くはないけども、アルバイトは趣味の延長で出来るけど、仕事となると趣味に対するオンとオフの切り替えができなくなってしまうんじゃないかな。熱中しっぱなしだとキツイと思う。

私：あと、仕事って自分が好きなことだけをやるわけじゃないから、趣味が趣味でなくなってしまうんじゃないかっていう不安もあると思う。中継のアルバイトは自分が好きなことだけが出来た？

S：そんなことはなかったけど、スポーツ中継っていうはっきりした目標があったから、何をしていても嫌になることはなかったかな。

私：でも、自分が好きなことを仕事にできる人ってやっぱり凄いよね。身近な人でそういう人っていた？

S：合気道の師範にそれを質問したことがあるけど、「餓死するよ。」って言われた（笑）それぐらい合気道で飯食っている人は少ないってことだね。

私：やっぱり難しそうだね。でも、好きなことを仕事にできてる人って本当にすごいね。やっぱりそういう人って何か違うのかな？

S：自分でレールを作っていくってこととリスクを恐れない所かな？将来がはっきり見えないのに目標に向かって頑張っているのは凄い。

私：何よりも、好きなものに欠ける情熱が普通の人よりも半端じゃないのかもしれないね。

S：あと、少しでも自分が好きなことに関わる仕事を探そうとしている人もいるよね。

私：そうだね。僕もサッカーと音楽が好きなんだけど、それを通じて海外に興味を持つようになったから、実際にそういうことに少しでも関係のある仕事とに就きたいと思ってる。

S：僕は趣味と仕事は分けて考えてるから、特にそういうのは考えてないかな。

「趣味」を仕事にするのはとても大変で勇気のいること、という認識はやはり共通していた。それは経済的な問題、そしてそういった分野はとても競争が激しいということが理由として挙げられる。また、趣味を仕事にした際のデメリットを考えた際に、S君と私で意見が異なったのが興味深かった。S君が「仕事となると趣味に対するオンとオフの切り替えが出来なくなってしまう」と考えたのに対し、私は「自分が好きなことだけをやるわけじゃないから、趣味が趣味でなくなってしまうんじゃないか」と考えた点である。この時の私の考えは、例え趣味を仕事にすることが出来たとしても、仕事の厳しさや大変さに直面するにつれて、プライベートの時間での趣味に懸けるモチベーションが下がってしまうのではないかというものであった。

最後の部分で、S君は趣味と仕事は分けて考えていると言っているが、将来私は自分の趣味と少しでも関係のある仕事を行いたいと考えている。前で述べたように、「趣味」にはそれ自体の魅力だけでなく、それに付随する魅力も多く存在するので、前者は無理だとしても後者の魅力を仕事においても感じたいと思っている。したがってサッカーや音楽などの趣味を通じて感じた魅力に共通する部分—例えば人と触れ合うことや国際的なところなどを仕事においても求めていきたいと思う。

—「趣味」とはなにか

私：今回のテーマは「趣味と私」っていうテーマだけど、ちょっと意図してたものとニュアンスが違ってたかな。「熱中していること」と言った方が正しかったかも。「趣味」というと、あくまで余暇に気分転換に行くようなものっていう感じがするような気がする。

S：合気道やスポーツの話も実際熱中してたから本意には外れてないね。

私：「趣味」と「熱中していること」ってニュアンスが違うと思う？

S：確かにニュアンスは違うけど、目的は同じだと思うよ。≒に近いと思うよ。

私：でも趣味というともっと気軽なもののような気がする。だから「趣味」の中に「熱中していること」が含まれてるっていう感じかな。

S：あと、仕事に熱中しているのと、趣味に熱中しているのでは違うと思う。対価が発生しているかないかということ。

私：なるほど。確かにお金をもらえなかったら誰も仕事に対して熱中しないしね。そういう意味では「趣味」から発展した「熱中していること」っていうのは、対価も無しに打ち込めるものっていう意味になるね。最後の質問になるけど、この「対価も無しに打ち込める」趣味ってS君にとってはどういう意味がある？

S：人によっていろんな意味を持つモノだと思うけど、例えば生きてゆくための糧だとか、そういった大層なものじゃないと思う。「趣味」はそれ以上でもそれ以下でもなく日常生活を構成する一要素だと思う。

私：じゃあ、それは欠かせないモノなんじゃない？

S：そうだね。日常には当たり前のことが欠かせないと思う。特別なことじゃないっていうことは、逆を言えば自分の素の姿を表してるものだと思うし、それが自分にとっての「趣味」にあたるかな。

私：大袈裟に言うほどのことではないけど、なくてはならないモノっていうことだよな。

S：そうだね。

私：今日はどうもありがとう。

S：いえいえ。

対話の中でも述べたが、テーマの内容を考えると「趣味」という言葉よりも「熱中していること」という言葉の方がニュアンス的に正しかったのかもしれない。「趣味」と言うと少し気軽なものといった感じがしてしまうからである。また、自分から見るとS君は合気道など「趣味」に対してとても熱中しているような印象を持っていたので、趣味は「生きてゆくための糧だとか、そういった大層なものではないと思う。『趣味』はそれ以上でもそ

れ以下でもなく日常生活を構成する一要素だと思う。」という発言は少し意外であった。しかし、その後に S 君は趣味は日常に欠かせないものであり「自分の素の姿を現しているもの」と言っているように、S 君は「趣味」に対してある程度距離を置きつつ、しかしとても大切にしているという姿勢を持っているということを感じた。

○結論

この活動を通じて、自分にとっての「趣味」とは何なのか、という問いに対する答えはある程度具体的に考える事が出来たのではないと思う。すなわち、私は趣味に対して様々な魅力を感じ、それを大切にしてきた。しかし、趣味を仕事にすることはとても大変なことであり、だからこそそれはとてもやりがいのある仕事でもある。そのような中で、将来私は少しでも趣味と関係のあるような仕事をしてみたいと考えている。

また、対話の最後の部分では、仕事とは別のプライベートな意味での「趣味」というものが自分にとってどのようなものであるのかという点についていろいろと話し合う事が出来た。そこで S 君は自分にとっての趣味は「日常生活を構成する一要素」と述べていたが、対話後この点について私は次のように考えた。つまり、これまで、私は大学までは部活動やサークル活動を通じて「趣味」を「熱中していること」に変えてきた。この意味ではここでの「熱中していること」は日常生活を構成する一要素以上のものであると思う。しかし、社会人になると、そうした「熱中していること」はやがて「趣味」へと変わり、日常生活の一要素になってしまうのではないと思う。あるいは、完全に止めてしまうかもしれない。社会人になるとなにより大切なことは仕事であり、家庭を持つようになるとなおさら、「趣味」に時間をかけることは難しくなるので、これは当然なことであると思う。しかし、私は、何かに熱中することは素晴らしいことであるし、それを途中であきらめるのは非常にもったいないとも思うので、社会人になっても、プライベートの時間を大切に、出来るだけ仕事以外の何かに熱中していきたいと思った。

○おわりに

そもそも、この「考えるための日本語」という授業を選択した動機は、友人に日本語教育センターの授業は留学生の受講者も多いと聞き、多様なバックグラウンドがある人が集まって面白そうだと感じたことである。また、2つ目の理由は、今まで受けてきた授業がゼミ以外はほとんどが講義形式のものだったということもあり、少人数でのグループ形式というこの授業の特徴に魅力を感じたことである。

授業を受ける前は、グループ形式ということでディベートのようなことをやるのだろうと考えていたが、それは全く違っていた。課題図書となった『わたしを語ることばを求めて』でも頻繁に言及されているように、この授業では抽象的、あるいは一般的な事柄について話し合うのではなく、常にわたし自身について考え、話し合う事が求められた。したがって、ここでは一般的なディベートでよく聞かれるような「日本人は～」や「海外は～」

などといった言葉はあまり出てこない。偏見やステレオタイプで物事を語るのではなくまずは自身の身近な所から話していこうという意図からである。それは私自身にとって新鮮であったとともに初めの頃は戸惑いもあった。よって、授業が始まって最初のころはこの授業の特性が掴めずにテーマ探しに苦労した。しかし回を重ねるごとに求められていることが自分の中で明確になり、「過去・現在・未来をつなぐ」、自分にふさわしいと思えるテーマを選択することが出来た。また、私は「趣味とわたし」というテーマを選択したが、周りを見渡してみると、自分が一番熱中していることをテーマとして採り上げている人が多いように感じた。わたしを語るというこの授業の特性からの理由かもしれないが、この点においては、自分のテーマがグループのメンバーのテーマと重なりあう部分が多く、議論をしていく上でもやり易かったように感じた。

私はこのレポートの中心部分である対話活動を通じて、数多くの事について学ぶことが出来たと思う。特に、対話をすることによって自分の考えをさらに深めることが出来ると言う事に気が付いた。対話の前にはある程度質問を用意し、それに対する答えもなんとなく考えていたのだが、いざ対話が始まり議論をしていくと、自分でも予想していなかった返答が次々と帰ってきたのには驚いた。そして、そのような相手の意見に触発され自分の考えもさらに磨かれていく様子を感じ取る事が出来た。これは、自分ひとりだけで何かを考える際には決してできないことであると思う。今回の対話相手は身近な友人で、普段はこのような話はなかなかすることは無かったのだが、今回の対話活動を機に相手の考えを知ることが出来たのはとてもよかったと思う。また、反省点としては、1回きりの対話の中で、自分の考えを全て示すことが出来なかったという点である。後で対話を振り返ると、話足りていない部分や新たに思いついた考えがあることに気が付いた。したがって、もしそのような考えを再び対話相手に提示できれば、さらに議論が深まったのではないかと思う。

以上のように、この授業を通して私はわたし自身について語ることや対話の重要性を認識することが出来た。また、内容としては「わたしと趣味」というテーマに関する考えも深める事が出来た。したがって今後はこのような事柄を未来に活かせるようにしていきたいと思った。

「多文化共生」とは何か —ポルトガル語を学ぶ「わたし」のなかにあるもの—

松本裕典

I. テーマ設定

筆者は現在、早稲田大学の授業でポルトガル語を学んでいる。筆者の所属する大学院日本語教育研究科（以下、日研）では語学の授業は必修ではないが、かねてより学びたいと思っていたため、履修することにした。では、なぜ英語や中国語ではなく、ポルトガル語なのか。これは、筆者のこれまでの経験と大きく関わっている。

筆者の出身地は浜松市である。浜松市は日本で最もブラジル人が多く住む地方自治体である。そのため、小中学校ではクラスにブラジル人の児童・生徒がおり、同じ教室で勉強している。市街地に出かければ、必ずと言っていいほどブラジル人と思しき人とすれ違う。スーパーや飲食店でもポルトガル語が聞こえてくる。リトル・サンパウロと呼ばれるだけのことはあるのである。こういった環境で暮らしていたが、大学進学を機に浜松市を出ると、周囲の状況はまったく異なっていた。

大学は山梨県にある都留文科大学というところに通ったが、山梨県ではブラジル人はおろか「外国人」もあまり見かけない。休暇などで東京都へ出てくる機会も多くなったが、東京都でも浜松市で日常だった景色はあまり見られない。浜松市に住んでいた頃は、浜松市のような外国人集住都市の置かれた状況も、日系人の事情も、何も知らなかった。浜松市から出ることで、浜松市を外から見ることができたのであった。

浜松市を外から見ることで、「多文化共生」という奇妙な概念が存在することに気が付いた。「多文化共生」が、『外国人』と『日本人』が、ともに協力して同じ市民として仲良く暮らしていく状態」を指すのであれば、浜松市は「多文化共生」の街であると言えるのか。筆者のように浜松市のおかれた状況をまったく知らない市民が存在している実態は「多文化共生」であるのか。そもそも「多文化共生」とはなんなのか。そうした疑問が湧きあがってきた。

一方で、そのようなバックグラウンドがあり、偶然都留文科大学の副専攻で取った「日本語教員養成課程」で日本語教育の面白さに目覚めた。日本語教育の基礎を学ぶことで、これまで自分が学んできた「国語」とは別物である「日本語」の難しさを思い知った。そして、実に多様な日本語教育が存在しており、浜松市でも行われていることを知った。そのため、卒業論文では浜松市の日本語教育事情を明らかにしようと試みた。そして、もっと深く学ぶために日研に進学することを決意した。卒業論文でも対象として意識をしていたのは、日系ブラジル人であり、その頃からポルトガル語を学びたいと思うようになっていた。

ポルトガル語に興味を持った理由のひとつは、浜松市ではブラジル人が身近であり、彼らのことばを学んでみたいと思ったからであるが、別の理由として、英語から逃避したか

ったからというものもある。小学校から大学まで英語を学んできたが一向に身に付く気配がなく、英語を学ぶことに限界を感じていたのである。確かに英語は世界語になりつつあるのかもしれないが、局所的に考えれば、浜松市では英語よりもポルトガル語ができる教員のほうが重宝されるように、必ずしも英語がすべてではない。それならば、英語は英語のできる人に任せて、筆者はポルトガル語をやろう。そう思ったのである。

こうしてみると、現在の筆者に繋がっているのは、幼いころからの浜松市で置かれていた環境であると考えられる。見えないうちに「多文化共生」していた浜松市で育った筆者にとっての「多文化共生」とはなんだったのか。ポルトガル語を学ぶ意味は何か。そこで、今回はポルトガル語を学ぶ意味から、「わたし」との繋がりを見出し、同時に「わたし」の考える「多文化共生」とは何かということも想像してみたい。

以上が、テーマとその理由である。これを元に、テーマについてより深く考えるために対話を行なった。次節では、テーマ設定の動機文を元に対話を行なった結果を報告する。

II. 対話報告

テーマを基に対話を行なった。対話相手は、早稲田大学大学院日本語教育研究科修士 2 年の Y である。Y は、浜松市出身の 20 代男性である。また、高校時代までの 18 年間で浜松市で過ごしたという点も筆者と同じである。対話は、2011 年 6 月 15 日（水）16 時 30 分から 1 時間ほど実施した。場所は早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館の一室を利用した。

以下では、対話の音声記録を基に、具体的なデータ分析を試みる。データは、少し長くなるが、本稿のテーマである「ポルトガル語」と「多文化共生」について話題に上った部分を使用する。さらに本節の対話報告では対話相手を Y、筆者を H として表記し分析を試みることにする。なお、会話に登場した個人名・学校名などは伏せてある。

i. ポルトガル語について

H 「(前略) なんか今はなんだろう、英語を公用語に、あー社内の公用語にするとか、すごい小学校から英語教育とか、そういうふうな英語をやりたいようになってるけど、(中略) なんかそういう動きのなかで、その、でもじゃあ浜松は、まあ英語もまああれかもしれないんですけど、じゃあポルトガル語をやったって別にいいんじゃないかってそうすれば別になんだろう」

Y 「うん、そうそうそう、それこそね、その地域しかできないことだし、第二外、浜松に住んでる人、第二外国語でポルトガル語あったってなんのねえ？」

H 「そうなんですよ、別にそれが役に立たないってことはないし」

Y 「そうそうそうそう」

H 「掲示も読めれば、ああこういうこと、って。すごいポルトガル語始めて思ったのはあの、現在地って書いてあって、英語だと *You are here* って書いてあって、その下に *Você* って書いてあって、あの、*Você* ってのは「あなた」って意味なんですけど、その日本語と英

語とポルトガル語で、おなじことばでおなじ意味を表してるけど、「現在地」と「あなたはここにいます」と「あなた」って書いてある [資料 1]。なんかそんな些細なことでもなんか違いで気がつくことができたっていうのも、なんか、あ、面白いなって思ったひとつなんですけど。だからそういう些細な気づきなんかもあったりすると思うので、やっぱり全国一律で英語をやりましょうみたいなんじゃなくても、別にじゃあ浜松とか豊田とか豊橋とかそういうところじゃ、ブラジル人の人のまあスペイン語とかでもいいと思うんですけど、スペイン語とかポルトガル語とかそういうのをやってみるっていうのも」

Y「ね、それは面白いよね。なんか、私、②それこそ、もしそういう環境があったら、あ、私は浜松出身だからちょっとポルトガル語が分かるんです、とかね。そういうことが言えるわけじゃん」

H「そう、そうなんですよね。だから、そういうふうになんだろう、うーん、まあひとつになるといいなあっていうのはあるし、そういう部分で何かうーんまあ③自分自身ももしできれば何か働きかけができればいいなっていうふうに思うんですけど」

Y「それはでも面白いっすね」

(中略)

H「だからまあ、そういうのもあって④自分自身もポルトガル語勉強すれば、何か見えてくることがあるのかなっていうふうに思って、まあポルトガル語すごい、まあ、学部のと きから思ってたんですけど、やりたいなあって思っていました。そしたらたまたま早稲田に授業があったんで」

Y「へー、すごいね」

H「あ、これは勉強しようと思って」

Y「⑤早稲田にあって、浜松にないってのはおかしいよね」

H「そうなんですよね」

Y「⑥浜松にこそあるべきよね、ほんとは、ポルトガル語の授業って」

H「で、たぶんそんなにポルトガル語を教えられる先生もたぶんいないんだと思うんですけどね。まあだから浜松で、⑦だからこそ浜松でやってそういう人を別に養成したっていいわけだし」

Y「そうそうそう。なんかポルトガル語講座とかね、よくあの市民だよりとかに、見るとね、公民館とかでやってるけど」

H「そういうのはあるんですよね、そういうのはあるんですよね」

Y「それに喜んで行く人ってそんなにいないだろうし」

H「そうだと思うんですよね」

Y「学校の授業とか確かにあってもいいなっていうのは思いますね」

H「なんかそれはすごいそのとき思いましたね。そういう風になったっていうときに」

Y「僕もやっぱりなんか結構こう最近興味があるのが、学習者よりももっとこう日本人とか

日本語教師側のほうの意識の面、で、そっちに働きかけるのが日本語教育にできることかなってうちのちょっと考えてるんで。僕は読んで思ったのは、⑧たぶんその多文化共生は、その外国人の側がうんぬんっていうより日本人側をどう、どうするかっていうことなんだろうねって。すみ分けっていうよりも

H「はい。そうですね」

Y「そっちの意識かな。だから⑨その意味ではポルトガル語勉強するとかいうのはすごくひとつのアクションだし、すごく意味があるんじゃないかとは思ってます」

H「はい。そうですね、だからポルトガル語、たぶんそのやりたいって思ったときとか、勉強はじめたときに実際自分がそこまで意識できていたかは分からないんですけど、まあ⑩こういう文章書きながら、なんでポルトガル語かなって思ったら、やっぱりそういう部分があったかなっていうふうに思いましたね」

対話のこの部分では下線部①で H が、英語の社内公用語化や小学校からの必修化の動きに対して、地域の特性を考慮する必要があるのではないかという問題提起をした。それに対して、Y は下線部②で「私は浜松出身だからちょっとポルトガル語が分かるんです」と言うことができると指摘している。Y のこの指摘は、浜松とポルトガル語の関係が密接であると Y も認識している意思表示であると言える。H にとってポルトガル語を学ぼうと思った理由のひとつに浜松市出身であった経験を挙げたが、下線部②からもそれは間違いではなかったことが分かる。

一方で、下線部②で指摘された考えは H にはなかった考えである。下線部④からは、「何か見えてくることがある」のではないかと考えていたようすが見て取れるが、「私は浜松出身だからちょっとポルトガル語が分かるんです」という具体的な考えはなかった。だが、それに対して H は同意し、下線部③で「何か働きかけができれば」と意思表示をしている。これは下線部⑨で Y に「ひとつのアクションだし、すごく意味があるんじゃないか」と評価されている。ポルトガル語を学んでいる意味を考えていた H にとって、Y のことばによって意味を見出されたよい例である。

下線部⑤、⑥、⑦から言えるのは、浜松でポルトガル語がもっと広がりを持つべきであるという Y と H の思いである。下線部⑦では、浜松でポルトガル語を学ぶことの可能性も言及されている。H の「浜松でやって」「養成」という提案は、下線部⑤、⑥を受けて思いついたものである。

下線部⑩では、「こういう文章書きながら」と述べているが、「こういう対話しながら」と置き換えることもできる。実際にこの場面で H はそう考えていた。この対話の部分では、Y の指摘から H の考えが広がりを見せたことが明らかになったが、「こういう対話しながら」と置き換えることができるのは、そうした広がりがあったからである。

ここまでの対話の部分より、H がポルトガル語を学ぶ意味、浜松でポルトガル語を学ぶ可能性が明らかになった。では、ポルトガル語を学ぶことは「多文化共生」に何をもたら

すのか。そこで次に、「多文化共生」とは何かを考察するための対話の部分を取り上げる。下線部⑧で、Yが「多文化共生」が「日本人側」の問題でもあると述べているが、このキーポイントを基にYとHが多文化共生について対話した部分である。

ii. 多文化共生について

Y「僕はよくあの言うんですけど、ひねくれ者って言われるんですけど、⑧共生っていうことばが嫌いなんですよ」

H「あー、はい」

Y「共生してないじゃん。だって。すみ分けじゃん。共生しましょうって言って、じゃあブラジル人も日本人も仲良くしましょうって言って。でも私たちはここに住んでるけど、あなたたちはここに住んでねっていう。で、ときどきじゃあ思い出したように交流会やってあ、交流いいですねとかなんか、そういうことやってるっしょ。ていうのが、さっきのNIMBY¹とかの話とすごい関係あるなって思っていて。なんかだからどうしても僕自身もそうなんだけど、見かけるけど、確かに浜松だから、ブラジル人すごい見かけるけど、⑨自分の生活となんの接点もないっていう人たちの存在をどう考えるのかっていうのはすごい大きな問題だと思うんですね。だからなんか、多文化共生とはなんで、なんですか。聞きたいのは」

H「そうですね。その一応⑩私もその多文化共生ってことばは実はそんな好きじゃない、そんなにあんまり使いたくないんですけど。ただ、あんまり自分で変なことば作って使ってもそれは何ってなっちゃうので、とりあえずその一番分かりやすいことばとして社会に浸透してるのはたぶん多文化共生っていうことばだと思うのであのひとつ使ってるっていうのはあって、(中略)で、そのじゃあ、多文化共生って何かって言ったときにその考えたのは、やっぱりその⑪浜松はかなりやってる、多文化共生っていう意識してかなりやってる、その市のほうとかあるいはそのボランティアの人たちもそうだし、かなりそういう人たちはかなりやってるけど、実際はそういうのになんだろ、興味関心がない人のほうがたぶん多いと思っていて。で、やっぱりじゃあ全然多文化共生してないじゃんっていうのほんとにすごい思ってた、で、まあ自分自身の修論のテーマもなんかそういうあたりのこともなんかちょっとやりたいと思ってた。あのまあ修論のテーマ、まち、最初はまちづくりで出してたんですけど、まあまちづくりって難しいし」

Y「そうだね、はは」

H「たぶんいきなりそんなの修論で書けないのもっと調整していきたいと思うんですけど、あの一、ただま、なんだろ、大学院に来て、とか日本語教育を研究するっていうところで、自分自身がやりたいのは、その最終的なところとしてはまちづくりみたいのがある、

¹ ニンビー。Not In My Back Yardの略。社会的に必要であるが、自分の家の裏庭(近所)にはあってほしくないと考えられがちな施設や集団のこと。ここでは、浜松のブラジル人をNIMBYの一種であるとしている。

あったので、それでそんときに多文化共生のまちづくりに日本語教育は何ができるかみたいところだったんですけど、それでその話を考え、まあ研究計画を考えるなかで、その浜松の多文化共生まあ浜松だけじゃないけど、その^⑩多文化共生っていうことをもっとその市民が意識して、多文化共生いうふうにしてやってくんだったら、もっと市民が意識していかなきゃいけないって、今はそのなんだろう日本語教育だとか外国人支援だとか、そういう人たちにはこういろいろ言って、もちろん外国人に対しても、支援とかあの窓口、ワンストップの窓口作ったりとかしてやってるけど、実際それに関心のない市民に対しては何をしてるかって言ったら、たぶん何もほとんど何もしてなくて、交流協会とかがじゃあブラジルの料理のパーティーなんかしましょうとか、そういうのはやってるけど、結局それって共生ではないし、やっぱりそのあの、ご飯、ブラジル料理を食べますとかサンバフェスティバルをやりますとか。それはもちろんそれはきっかけとしては大事かもしれないけど、でもそれで終わっちゃったら結局、はい楽しかったねって終わりって、結局実際そのブラジル人の置かれてる状況っていうのも何も分からないし。っていう部分があるので」

Y「そうだよな」

H「かなりそのへんで、かなりやってるっていうのは分かるけど、^⑩多文化共生やってるってのは分かるけど、でも実際多文化共生はできてないし、じゃあどうすればいいのって言ったときに思ったのが、じゃあそのなんか、まちづくりに何か、まちづくりそのものはたぶんできないと思うんですけど」

Y「うんうん」

H「まちづくりに何か活かす方法とか視点とかそういうの考えたいって思ったんですけど。だからやっぱりあとはその浜、交流協会の H さんっていう方ともお話をしたときに、やっぱり H さんも、その多文化共生っていうことばはやっぱり結局、多文化って言うってことは結局あなたと私は違うん」

Y「そうそうそうそう。うん」

H「だっていうのが前提にあって。で、違うけどでもまあ一緒になんかやり、なんかやってみましょうみたいなのが、すごいいいわるい言い方するとということだよなっていうふうにすごいおっしゃってて、それもほんとそうだなっていうふうにしてやっぱりなんかそういうまあもちろんその K さん(当時の浜松市長)もそうだし、そういうなんだろう、やってる人たちはそういう認識っていうか意識はもうできてるし、そういうふうにも思ってるけど、でも実際はやっぱり全然市民のほうには浸透してないん、まあもちろんそこで手いっぱいってのもあるんだろうけど、浸透してないなっていうのはすごい感じますね、うーん」

Y「そう、でもそうですね。もうでもやっぱり^⑩動いてる人は動いてるんだけど、結局はそのふつうの人、一般市民が、まあ浜松に住んでる人が、その市民のまあ一部がもうブラジルの人が多い、日系人が多いっていう事実に対してどう考えていくのかとか。今何を

浜松は何をしているのかとかそういうことを知る、ある意味啓蒙活動みたいなのが、むしろ大切だなっているふうに思っています」

H 「はい、そうですね」

Y 「うん。で、その今ちょっと例であったたぶんそのなんだまあ多文化ってということば自体が結局は私とあなたの違いをっていうのは、もうでも確かにその通りだろうなって思っています。でもじゃあ、いやそうじゃないわ、あの、地球人として同じなんだって僕はそういうのすごい嫌いで。だけどなんか違うんだけど、⑮違うんだけどなんか同じ共通点っていうのもあるわけだし、その共通点と違いをなんかもうちょっと見ようとする意識みたいなのが、高まるほうが必要だなって思っています。だからむしろこういうのがそのさっきの話もそうだったんだけど、ブラジル人を呼んでどうこうしてっていうよりもなんかブラジル人側がこう、まあ日系人側が、強者の論理かもしれないけど、ブラジル人側が向こうにアピールしていくし、アプローチしていくし、こっち側もそれにこう歩み寄ろうとしていくっていう。なんかそういうののつなぎ役みたいなのをやれるのがまあ市役所であったり、そういうのに関わる人であったり、で、こうだんだんだんだん繋いでいく。別にあの同じになろうっていうよりもまあ知ろうとするっていうことだけでもだいぶ違うのかなと。(後略)」

この対話の部分では、YとHの考える「多文化共生」の像が見える。まずYは下線部⑮で「共生ってことばが嫌い」、Hは下線部⑮で「多文化共生ってことばは実はそんな好きじゃない」とそれぞれ本音を述べている。それでもHが今回、多文化共生ということばを使ったのは、「あんまり自分で変なことば作って使ってもそれは何ってなっちゃう」からである。

一方で、現実を目を向けると、下線部⑮「興味関心がない人のほうがたぶん多い」や下線部⑮「多文化共生やってるのは分かるけど、でも実際多文化共生はできてない」といったHの発言からも見えてくるように、「多文化共生」は浜松市においても実現していない。下線部⑮で「一番分かりやすいことばとして社会に浸透してるのはたぶん多文化共生ってことば」とHが述べているが、「社会に浸透してるのは」あくまで「多文化共生ってことば」だけであり、実際には「興味関心がない人のほうがたぶん多い」のである。

それでは、当事者はどうしていきべきなのかを考えるために次の発言がある。下線部⑮にあるHの「もっと市民が意識していかなきゃいけない」、下線部⑮にあるYの「浜松に住んでる人が、その市民のまあ一部がもうブラジルの人が多い、日系人が多いっていう事実に対してどう考えていくのか」という発言である。これらの発言からは、「多文化共生」のためには、地域に暮らす市民がもっと外国人のことを意識する必要があるのではないかという問題提起がうかがえる。これは前項の下線部⑮でYが「日本人側」と述べた部分とも関連する。その大切な意識をYは下線部⑮で「共通点と違いをなんかもうちょっと見ようとする意識」であると表現している。

Ⅲ. 結論

今回、Yと非常に密度の濃い対話を行なうことができた。対話によって、当然であると言えば当然であるが、同じ浜松市出身でありながら、共通で理解できる部分とそうでない部分があることが分かった。しかし、それぞれ「多文化共生」ということばには否定的でありながらも、その可能性を模索しているようすがうかがえた。

Yとは同じ浜松市出身という理由で今回、対話をさせてもらった。この対話により、少なくとも浜松市とポルトガル語あるいは多文化共生を関係づけて、それを疑っていてもいるのは筆者だけではなかったことが明らかになった。他人が考える「ポルトガル語」や「多文化共生」を知ることで、自分の考えを改めて理解することに繋がったと言える。

筆者はテーマ設定の動機文で、ポルトガル語を学ぶ理由として「ブラジル人が身近であったこと」「英語から逃避したかった」ことを挙げた。対話のなかで明らかになったのは、その2点は理由というよりもきっかけであり、筆者の問題意識にも関わっていたということである。さらに、ポルトガル語を学ぶ「わたし」が、「多文化共生」とどう関係するのか、という問いも、「日本人側」の意識としての「ひとつのアクション」になりうるという答えが示された。

この対話から考えたことは、浜松市には「多文化共生」の可能性があり、それを意識していくことの必要性を感じている人がいるということである。そのためには克服すべき課題が多くあるが、筆者にもできることがあるということが分かった。

対話でも話題に上ったが、ポルトガル語を学び続けることが、「ひとつのアクション」として「多文化共生」に貢献できれば幸いである。また筆者の未来へと続く大きなテーマとして「多文化共生」はあるのだと結ぶことができる。「多文化共生」の実態は見えてこないが、確実に筆者のなかに存在する。それはすなわち過去から現在、そして未来へと繋がるテーマとして位置づけることができるのである。

Ⅳ. おわりに

本稿は早稲田大学2011年度春学期の「考えるための日本語（テーマを発見する）」（以下、「考えるための日本語」）という授業における活動の記録である。最後に、本稿に至るまでの試行錯誤の連続から、この授業の意味を述べる。

「考えるための日本語」は、シラバスによれば「自分の過去・現在・未来を結ぶテーマを発見」するための活動であるとされている。活動の目的が「自分の過去・現在・未来を結ぶテーマ」の「発見」であるとするれば、目的については達成できたと言える。

では、その目的を達成するためのプロセスとしてのこの活動にはどのような意味があったのであろうか。この活動は、それぞれ5～6人のメンバーからなるグループを無作為に作り、グループ活動として行なわれてきた。この授業の真意は、まさにこのグループ活動にこそあったと言える。

グループ内では、それぞれが持ち寄った各段階の文章について議論する活動が行なわれていた。筆者は、「チーム・ビートルズ」というグループの一員として、議論に参加した。議論のなかで、それぞれのテーマが深まっていくのを感じることができ、このような形で最終レポートにまとめることができた。レポートを仕上げる作業には、グループのメンバーからのアドバイスを欠かせなかった。自分ひとりでは思いもよらなかった部分を指摘され、「過去・現在・未来を結ぶテーマ」の道筋が見えてくるのである。その点では、対話活動もそれに似ている。

グループのメンバーや対話相手といった他者から、自分とテーマとの関わりについて客観的にコメントをもらうことで、「自分の過去・現在・未来を結ぶテーマ」の「発見」という目的が達成できる。この授業で明らかにしたいのは「わたし」のことでありながら、「わたし」だけでは明らかにすることができない。「自分の過去・現在・未来を結ぶテーマ」のなかに存在するのは、「わたし」だけではない。ともに考えてくれる他人の存在があってこそ、「過去・現在・未来」が一本の線で繋がるのである。それを明らかにできたことにこの授業の意味があった。この点は、細川（2004）も「レポートを書き終わって、一仕事が終わるといふ段階になると、その他者との信頼関係が取り結べたという、達成感を持つことができる」（p.32）と述べていることから明らかである。

資料

資料1 ポルトガル語表示の例



▲JR 浜松駅周辺の案内板におけるポルトガル語表示 [2010年12月3日筆者撮影]

参考文献

- 牲川波都季・細川英雄（2004）『わたしを語ることばを求めて—表現することへの希望—』三省堂.
- 細川英雄（2004）「『わたしのことば』で表現することの意味」牲川波都季・細川英雄『わたしを語ることばを求めて—表現することへの希望—』三省堂，pp.13-35.

早稲田大学メディアネットワークセンター「考えるための日本語（テーマを発見する）」『シラバス検索－シラバス詳細照会』<<https://www.wnz.waseda.jp/syllabus/epj3041.htm?pKey=9200007484012011920000748492&pLng=jp&pPage=1>>2011年7月16日閲覧.

1. 動機：エステルさんの日本語と向き合う姿勢の変化

2004年度の秋、私は都内の謀大学の日本語教育研究センターで「総合4B」という授業を担当した。このクラスは日本語中級レベルの留学生クラスで、学生5名の小さいクラスだった。その5人の中にエステル（仮名）という学生がいた。

彼女はアメリカ人で、当時アメリカのある大学の学部で日本語を専攻としていた。そして、高校の時に交換留学生として日本に1年間滞在したこともあった。このことから彼女が中級レベルのクラスにいるのが私はとても不思議だった。

しかし、授業をはじめてみると、彼女は私の予想とは違って、ぼそぼそとつぶやくような話し方をしていて、何を言っているのかがよく分からない時が多かった。その上、他の人が話す時はよく下を向いてノートに絵を書いたりしていた。私の授業が面白くないのか、それともただ話すのが苦手なのかなど、いろいろ気にはなっていたが、欠席することなく授業に来ていたので、私は授業を進めながら彼女の様子を見ていくことにした。

授業の内容は、魅力的だと思う人を各自一人ずつ決め、どうしてその人が魅力的だと思うのかその理由を書き、その人と対話をし、対話内容をクラスメートと共有するというものだった。彼女は、自分の短所を諦めず克服しようと努力する友達について書いていた。その理由は「日本語を話す時びくびくしてしまう」「英語が話せる日本人とは日本語で話さない。なぜなら自分の日本語が下手なことがばれるから」など彼女自身の日本語に対するコンプレックスからだった。作文検討の時はクラスメートから、「わーエステルさんってこんなに上手に書けるのに、日本語にコンプレックスを持っていたんだ」「自分のことをここまでオープンできるってすごい」「ここがもっと知りたい」「つまりこういうこと？」「こういうことが気になるなー」など作文そのものに対する関心から感想、質問、意見が次々と出ていた。そして、彼女の作文は授業を重ねていくに連れ「コンプレックスを克服したい」という彼女自身の気持ちがひしひしと伝わる文章に変わっていった。また、授業中の彼女はというと、自分のことを話す時だけではなく、他の人に対しても積極的に意見を発して、クラスのみんなを引っ張ってくれるリーダー役になっていた。

何がエステルさんをこういうふうに変えたのだろうか。自分のコンプレックスを克服したいと作文を書いたからだろうか。しかし、コンプレックスを克服したいと書いたからと言って、誰もがそのコンプレックスが克服できるとは限らない。また、私を含め4Bにいたものがエステルさんのコンプレックスを治してあげようと心がけたとしても、それがで

きる力量を備えたものは一人もいなかった。

ただ、当事の担当者としてはっきりと言えることは、4Bにいたものは、エステルさんの書いた・話した内容にひたすら耳を傾け、その内容を理解しようとしていたし、自分の理解したものがエステルさんが表したかった内容だったのかどうかを確かめることを繰り返していただけてであった。すなわち、エステルさんの日本語に間違いがあるかどうか、どんな間違いをしたか、どう変えたら正しくなるのかではなく、ひたすらエステルさんが表現しようとする内容と向き合っていたのだ。更に、その内容の良し悪しを語る評価ではなく、エステルさんが伝えたい内容が「伝わったか」「伝わらなかったか」「伝わったなら、どう伝わったか」「伝わらなかったなら、どう伝わらなかったのか」に徹底させていた。言い換えれば、エステルさん一人が書いたものに対して4Bにいたものみんなが、その内容と実直に向き合っていたのであった。このように、内容の内容と向き合うことが出来たことが、エステルさんの日本語と向き合う姿勢を変えたと私は考える。

2. 対話

私は1. に登場する4Bクラスのエステルさんと対話しながら、エステルさんの日本語と向き合う姿勢が変わった理由をもっと探ってみることにした。現在、彼女はグルジアという国で英語を教えるボランティアをしているため、直接会って話すことが出来なかったので、スカイプで約90分ぐらい対話を2回行った。

(エ：エステルさん、私：筆者)

2-1. 「正しい日本語」へのこだわりが表現することの妨げになっていた

私：(クラスの)最初はどうだった？

エ：最初はすごい緊張してきた。

私：すごい緊張した？

エ：すごい緊張した。ほとんど何も話さなかったんじゃないですか？

私：そう、何も喋らなかったよね。

エ：エステルさん、意見は何ですかっていつも(笑)、でも、話さなかった。

私：どうして話さなかった。。あまり話したくなかった？

エ：話したくても、ちゃんと日本語が出るかどうか、出られるかどうか、不安で話さなかったかな、

私：あ、そうか、最初はすごい緊張して、何も喋らなかったね。

エ：日本語を話さなきゃいけない・・・場面をを、避けてました。

私：日本語を話さなければならぬのを避けてた。それはどういう意味？

エ：英語が通じたら、私英語で喋った。でも授業中で英語で喋るわけにはいかないじゃ（笑）

私：でもそうよね、授業中私のレポートにも書いたけど、人が話す時は一人でよく絵を書いたりしてたよね。

エ：そう、人の話を聞くときは絵を書くのがすきな、それはたぶん関係ないと思います。（中略）

私：まあ、最初はあまり話さなかったけど、でも、なんだろう、最初からエステルは自分のコンプレックスのことを、あのお、書いて出したでしょう。だからみんな書いたものを読んだ時にびっくりしたんじゃない？

エ：はい、びっくりした、そのびっくりに対して、私、逆にびっくりした、そのびっくりに対して。私はそれが、私のコンプレックスがみえみえだったと思ったんです。書かなくてもみんなが分かることだと思ったから。なんかどこに行っても評価されてるといふ、感じたの。

上記のエステルさんの話から、授業の初めごろのエステルさんは、他の人の話はよく聞いていたけど、自ら話すことには抵抗を感じていたことがよく分かった。そして、彼女の「ちゃんと日本語ができるかどうか」「不安」という発言から、彼女自身は、何を話し、その内容が相手にどう伝わるかよりも、自分が話す日本語に間違いがないかに注意を向けていたことも伝わってきた。このことは、彼女自身が持っている「日本語を上手に話す」ことの物差しが「形」に向けられていることを表している。もし私も文法にミスがない日本語を上手な日本語の物差しとしていたら、他の人が自分の日本語のミスの評価しているのではないかと思い、確かに、このようなレポートも書けなかつたろうし、今のグループメンバーともうまく話せなかつたろう。すなわち日本語の「形」へのこだわりが表現することの妨げになることが言えよう。

2-2. 内容と向き合うことは自分と向き合うこと

しかし、彼女の日本語に向き合う姿勢は1. で述べたように変わっていった。人の価値観はすぐには覆されないと思うが、正しい日本語へのこだわりが強かった彼女はどのように変わっていったのだろうか。ここからはそれについて考えていきたい。

2-2-1. 人に伝えたい話題

私：でも、まあ、あまり長くは話さなかったけど、段々授業中話すようになったんじゃない？

エ：そうです、話すようになりました。多分、1年間も留学してたからその前に、日本語が頭の中に入った。文法も単語も。ただ、それを使わなかったから、最初は難しかったんです。時間がかかった。（中略）

私：うーん。ということは、だんだん以前勉強した、その語彙や文法も思い出して、あと、ま、自分をちゃんと日本語で表す日本語も言えるようになった？（エ：はい）のは、どうしてかな、ただ日本語を、前、勉強した文法とか単語を思い出したからそうなったのか、

エ：(中略) その授業に入って、やっと私が話したい話題が出てきて、出てきたのね、いろいろ。ものすごく自分が言いたいことが、ま、人に伝えたくて、ま、どうでもいいと思ったの、もういいや(笑) もうあもう、変な日本語を使って、話して、それでもいいや、そのアイデアをその相手に伝えたかったから。

私：あー自分が言いたいことが

エ：前の、前の1年間は、その大学じゃなかったから、高校だったから、別にそこまで、ファッションのこととか(笑) 食べ物のこととか、で、たわい、たわい、たわいなる話(笑) という、(私：うん) もう話さなくてもいいんじゃないかなと思って(笑)、私は興味もなくて、その話、その興味とリスクを比べたら、そのリスクのほうが大きかった。での、その授業に入ったら、興味とリスクを比べたら、やっぱり興味のほうが強かった。(中略)

エ：うん、変な日本語を使って、自分が、ま、ちゃんとした自分が、表せない可能性もあるんじゃないですか？(私：うん) 違うエステルをその人たちをその瞬間をみてもそれでもいいと思った。それにしても、私が、その、今の言いたいことが言いたくて、(私：はい、はい) あと、それに、日本人が一人もいなかったのね(笑) それに私は少しほっとしたの。

彼女の「日本語へのこだわり」は、私のクラスに来て、すぐその姿を消したわけではなかった。ただ彼女の話からはっきりとしてきたのは、正しい日本語へのこだわりや日本語の間違いに向けられる人の目を気にするところを持っていたが、表現したいという気持ちがそれに増さり、「変な日本語でもいいや」という気持ちになっていたことだ。彼女が表現したかったこと、人に伝えなかったこととは何だったのだろうか。

2-2-2. 人と一緒に向き合う「私」

私：でも、その、なんと言うんだろう、違うエステルを表すかもしれないけど、それでもいいやと思えるようになったのは、やっぱり授業の話題がそれだったから？

エ：そうですね。

私：じゃあ、そのクラスのその、何というんだろう、クラスでやってたこと、自分のことについて、ま、魅力的な人だったけど、自分が魅力的な人を決めて、何を書くかも決めて、そういう授業の内容がエステルさんにとっては大きかったんだね。

エ：そうです、大きかったです。あと、その魅力的な人じゃなくて、それ、なんで自分がその人を、の魅力を感じるの、かが面白かったです、私にとっては、他の人の話を聞いて。

私：それはなんで？

エ：その、決めた決めた人が、それから、決めた人についての話じゃなくて、その決めた人の話をするとう自分のことがもっとよく見え、見えた。それがすごい面白かったです。もう一回日本に行こうと思ったのは、このコンプレックス

を克服したいと思って行ったのね、でもそれをどうやってやればいいのか分からなかった・・・なんとかやると思ったんです。(中略)

私：でも、決めた人の話をするけど、やっぱり実は自分の話だったというのは、自分の話になるんだというのはどのぐらいで気づいた？覚えていますか？何回か話しているうちに？それともクラスの人から、ま、いろいろ言われてから？

エ：聞かれた時に、その人についてはこの人たちは興味を持つんじゃなくて、私について興味を持つんだと思って(笑) だったら書くと思った(笑) そう、質問のせいでそうになりました。

このクラスでのタスクは、みんなそれぞれ魅力的だと思う人についてレポートを書くことだった。そして、最初は各自が決めた人のことについて書くけど、それが段々ある人を魅力的だと感じる「自分」のことを書く仕組みであった。そのため、レポートを書いていた本人はもちろん、エステルさんが言ったように、クラスの人も自分の目の前で語るエステルさん自身に興味を持つようになっていた。それがエステルさんにも伝わっていたのがよく分かった。つまり、エステルさんが向き合っていた内容とはエステルさん自身のことであったが、それをよりよく書いていこう、伝えてみようという気持ちにさせていたのは、クラスのみならず一緒にエステルさんが書く「私」と向き合っていたからではないかと思った。

2-2-3. 他人だから見える／気になる「私」と向き合う

「だったら書くと思った」というエステルさんの発言から、人が自分に興味を持つことと、表現すること(書くこと、話すこと)にどんな関係があったのかについてもっと聞いてみたくなった。

私：でも、自分が決めた人の話をするけど、やっぱりそれは自分の話をする事だから、なんとなく一人でも出来そうな、それだけを聞くとなんとなく一人でも書けそうじゃない？

エ：書けなっと思ったと思いますよ、そこまで、たぶん深く考えない、考えさせられなかったら、あと、その方向も見えないかも知れない。どういうふうによく考えたら、答えがでるか、それが自分に近いことだからちゃんと見えないの、他人が見れるのね、客観的に、その確認しながら、これ考えてもいいか、これ、やっぱり答えになるのか、話をしながら、自信が自分の身につく、

私：自分に近すぎるから他人には見えるけど自分には見えない部分というのがやっぱりある。

エ：ある、ある、というか、これに接したくない、痛いかも知れない、痛いというか、気まずいかもしれない、いやな気持ちになるかもしれない、と他人がそれが感じられないんじゃない、見えないから、だからしつこく質問できるんじゃない？(私：そうか)

私：哲学者？

エ：そう、やっぱり考えるためには人は他人が必要になる

私：あーそれは、あのう、そうよね、あのクラスの時もそう思った？

エ：そう思った、やっぱり壁にむいて話すより、話した、話しても多分効果が出なかった。(中略)

私：考えにいく、、

エ：そうです、考えに行ったの

私は、4Bを、一人一人の言葉をしっかりと受けとめてくれる人がいる場、だから自分のことが考えられる場であると自分なりに考えてきたが、どこか「考える」のにも正解があるような解釈で気に入らなかつた。しかし、「考えにいく」というエステルさんの言葉耳にした時、これこそ4Bを的確に表す言葉だと感じた。どんなふうに考えるかは人それぞれで、それぞれのスタイルで考えにみんなが集まる場、それが4Bという教室だったのだ。では、「考えにいく日本語教室」でエステルさんは何を掴んでいたのだろうか。「私」のことを考えるだけで、日本語の正しさ、「形」はまったく無視をし通常の日本語の教室のような役割は果たしていなかったのだろうか。

つまり、最初エステルさんがこだわりを見せていた日本語の正しさ「形」について聞いてみることにした。

2-3-2. 日本語で実現するアイデンティティ・見つけるアイデンティティ

私：エステルさんにとっては4Bは何だったの？

エ：ただ、、新しい自分をつくった機会だった、(私：うん？)

エ：日本語でのエステル、自分のアイデンティティは英語でしか表現できないと思った、英語でしか表せないと思った、で、4Bのおかげで外国語でも、自分の、自分らしい、アイデンティティがまき変えた、出られるんだという自覚もしたの、日本語でのエステル、自分らしいアイデンティティをつくる機会だった。

(中略)

私：日本語で自分のアイデンティティを表現したというふうに言ったけど、それはなんだろう、、(中略)

エ：(中略) やっぱり違う言語を使うと英語でもエステルと日本語でのエステルは、やっぱり違う。でも、すごい近い感じになった。

私：たぶん、絶対英語で表現できるエステルと日本語で表現できるエステルは違うと思うんだけど、日本語で表現するエステルに満足、あのう、するようになったわけじゃない？

エ：そうです。早稲田にいたときは満足しました。

私：うん。その満足させたのは何だったと思う？

エ：意見がちゃんと相手に伝わったの、説得、させた？させられた、させることができた。そう、自分がしたいことをその言語で出来たから。

私：それはやっぱり一回で出来たわけじゃないでしょう。

エ：そうですね、でも、やっぱり4Bのクラスのなかでそのアイデアが重要だったから必死にがんばったの、これ言わなきゃ、話さなきゃ、(私：うん、うん) 口から出さなきゃ、で、出してみたの(笑)(私：うん)(中略)話す時は相手の反応に影響をさせたいんじゃない？その影響が見えたから、自分のしたい影響、期待してた影響、やっぱりさせてるんだ、私は話す能力があるんだ。例えば、人、冗談を言うときに相手を笑わせたいんじゃない？あ、成功した(笑)、説得したい時に納得で来たの相手が、成功したと思った。(私：うーん) やっぱり相手の反応を見て、自分がしたいように変わってほしいんじゃない？行ってる場面が見えたから、

私：それはレポートを読んで、みんなから伝わってきた、あ一分かったとか、そういう反応があった時の話？

エ：それ、多分40%かもしれない、ほかの60%はクラスのやりとり、態度、雰囲気を含めて、ある人はあまり、すごいストレスがかかっているそのレポートの部分で、一つのことを言って、その人の笑い、笑顔が見えて、それも影響がありました、私にとっては。この場面で人のムードも変えられるんだと思った、(私：うん、うん) 人の考える幅、広げることが出来る。

私：あと、エステルがレポートについて意見を言った時にレポートに反映させた人も結構いたんじゃない？

エ：そう、いました。そう、自分の意見を伝えるのもうれしかった、でも、そっちのほうがうれしかった、人の意見を立てる、助けられたんじゃない？それが楽しかった。

私：それが日本語でのアイデンティティ？

エ：それはたぶんもともと英語でそうしているからかもしれない。英語で会話している時には。

私：そうしているということはどういうこと？

エ：人の観点を変える、視点を、少しだけ、広がったり、広げ、させ、てる、立場になっているので、だから、それが日本語でその立場にも出来たというのもうれしかった。

私：エステルさんはもともとディスカッションをしたり、ディベートをしたりすることとか、一つのテーマを深く掘り下げていくことが好きだった？

エ：大好き！！(笑) 大好き。私が生きているんだという感じ、させるの。で、それができないと、それをしないときは、ま、別に日本語話さなくてもいいと思ったの。(中略)日本人は同意する人が多い、から、私が違う持っているとしてもそれを言い出す場面があまりなかった。その4Bは特別だった。(中略) それしないと、4Bはたぶん卒業できなかったから、多分、みんなそうしなきゃだったから、これはいい、これ気持ちいいと思った(笑)

私：じゃあ、エステルさんは、もともと自分が好きだったディスカッションが出来たことと、ディスカッションすることで人に影響を与えることが出来たから、自分のアイデンティティが表現できたということ？

エ：その通りだと思います。

私：じゃあ、ディスカッションがあまり好きじゃない人は、自分のアイデンティティは表現できなかったと言えるかな、

エ：それはないと思います。(中略) 私はもともとこういうふうを考えるのが好きなの自分の母語でも、でも、そうではない人も、そうしなきゃいけないから、また、見つかるしかない、みるしかない、深く考えるしかない、そうしないと、人の質問を、そうしないと、人の質問、答えられないんじゃない？

私：じゃあ、そうするとエステルの場合は日本語で、もともと自分がもっていたアイデンティティ、あのう、ディスカッションをしながら自分の主張をはっきり表す、そういうアイデンティティが実現できた、そうじゃない人、エステルさんのような性格じゃない人の場合は、そういうアイデンティティを持っていなかった人は、

エ：自分の独特のアイデンティティを持っていると思うんだけど、でも、それがちゃんと見えない、質問されないと、なんでこういう人が好きなのか、前に考えたことがなかったら、考えるしかない、だから、それを見つけ出すの、あの、もともとはあると思います。でも、中がちゃんと見えないだけだと思う、

「自分のアイデンティティを日本語で表現できた」というエステルさんの話を私は本人が書いた作文のことから考えていた。つまり、自分が言いたいことがちゃんと書けたこと、人に伝わったことだと思っていた。だが、それは彼女がいうアイデンティティの40%にすぎなかった。英語で話す時の自分とは、自分の意見を言い合うことを楽しみ、自分の意見が人にどのような影響を与えるのかをみることを楽しむ自分であった。4Bでそういう自分でいられたこと、そういう自分が実現できたことの喜びが大きかったことに気が付いた。また、エステルさんのようにもともと人との対話を楽しむ人でない人でも、授業の仕組み上、自分の考えを深めていくプロセスをあらわにしながら(もやもやした状態を出しながら)自分のアイデンティティを見つけていたことにエステルさんが気が付いていたことに驚いた。作文を書くというタスクを完成させることも大事であるが、いかにそのプロセスが重要であるかを、あらためて、考えさせられた。

2-3-3. 自分と日本語をつなげた教室

今回は、日本語を学ぶ教室という観点から、エステルさん自身が自分を表現する過程でどんなことを考えていたのかを聞きながら、「形」についてもっと考えてみることにした。

私：じゃあ、その教室はどんな存在、これ、クラス自体がエステルさんにとってどういう意味があったのかということでもあるけど、私達がいつも集まって、ああでもない、こうでもないと話していたそこは日本語教室だったというふうに話していいのかな、

エ：日本語の教室という感じがしなかったんだよね、なんか友達の家に行くような感じだった。(私：笑)

エ：でも、それ、それだから日本語が生きてた、言語は、ま、ただ本で勉強するものだけじゃなくて、自分のアイデン

ティティ、自分の考えていること、自分、自分を、表す道具なのね、普通の日本語の授業だと、自分を表す練習をやらないんだよね、文法だけを勉強して、それと自分となんの関係があるのかははっきりが見えないんじゃない？はっきり見えないから、でも、その授業だと、その道具はどういうふうに分を表現するのか、表せるのか、が見えた。その橋をつくる教室だった。ま、その時、日本語が自分のものとなったの、今までは、自分、日本語について勉強したの、日本語を勉強したの、でもその時は、日本語が自分のもの、自分の一部となったの

私の日本語学習経験からも、エステルさんと同じように、語彙や文法の学習量が多いからと言って、自分のことがすぐ表現できるようにならないと言える。しかし、今まではその理由がはっきり分からなかった。同時に、4Bのように自分のことばかり話す教室が言語形式を習うのにどんな役割を果たしているのかもなんとなくとした答えしか持たなかった。しかし、エステルさんの「その道具はどういうふうに分を表現のかが見えた」という話を聞いて、4Bでは自分を表現することとその道具としての日本語との関係が一体化していたことから、自分を表現する過程には、自分について考えると同時に、それを表すための言葉を探りながら、自分が求めている言葉を掴んだときの感触が得られたのではないかと考えた。

2-3-4. 日本語の形からの開放からはじまる形への探求

ここで私は、言語形式としての日本語の表現を探る過程と、日本語が自分の一部になったということがどういうことなのかについて、言語形式を探る過程を中心にもう少し聞いてみることにした。

私：日本語が自分のもの、自分の一部となった

エ：感じたの、そう、もう日本語を勉強してるのも忘れたの、ただ、自分を、自分とコミュニケーションについてを勉強してるのね、それをもっと深く勉強するためには、日本語をちゃんと利用しないとできないと思って勉強しましたね、(私：うん)

エ：ある意味意識しなかったの、でも、それは、普通、普通の日本人同士が話す時は日本語を話してるんだ、喋ってるんだと意識しながら話さないんじゃないですか？

私：そうだね (中略)

エ：で、そういうふうになったの、なった自分を、ま、感激したの、そうなるんだと思った (笑)

私：そうか、話したいことについてだけ意識する、そうよね、今日本語を話しているとか、そういうふうに分ばかり気にすると何も言えなくなるよね、

エ：何も言えなくなるし、もう、考えなくなる、でも、やっぱり形のものも、あもう、気にしなきゃいけないときもあ

りますね、それは、自分、ちゃんと自分の言いたいこと、話したいこと、表したいことが、相手まで来てない、行ってないと感じたら、やっぱりこれ形のせいなのかなと思って、また少しその自分の語彙や文法を変えて話してみますね、あと、言った、やっと通じたと思った、やっぱり、この文法この語彙がこのときに正しいと自然に、ま、頭に入ってくるのね、このときはこういうふうに言ったら、やっぱり、ま、通じない効果がないから、それを使わないで、また正しい文法を使って、違う語彙を使って、(中略)

エ：だから、自分のもの、自分の一部となったと思った、もう、意識しないで、ただ、ま、自然に使っていたものだった、(私：うん、うん) なんか自分と違う存在だったんじゃないの、(笑) で、もっと自分らしい、もっとピンと来る自分らしい表現を、あ、使いたかったら、自然にもっと日本語が自分の身に付く、その表現を探すから、だから、心配しないで、ばんばん会話をしたら、日本語の、あのう、りょう、能力が自然に上がる、その会話と共に。(私：うん、うん、うん)

エ：このぐらいで自分を表していると思ったらそれでストップするかも知れない。でも、もっと深く、もっと詳しく、もっと自分らしい表現を、があると思ったら、が使えたらいいなと思ったら、うん、探して、見つけて、勉強すると思うよ、それ勉強になった(中略) その対話を違う人、違う日本人、違う日本語が通じる人に持ってきて話せば、ま、違う単語が出てくるんじゃない？違う文法も、違う考え方も、違う観点も

私：うん、そこから言葉をピックアップできた

エ：ピックアップできた。まあ、子供みたいに

エステルさんから言語形式を意識せず内容(自分を表すこと)だけを考えて話したという話を聞いたときは、表現方法でどういう関連があるのかが明確に見えなかった。しかし、話をよく聞いてみたら、「もっと自分らしい、もっとピンと来る自分らしい表現を探す」ことを一生懸命だった。この時エステルさんのやっていた「表現を探す」ことは、彼女が授業の初めに抱いていた「日本語の正しさへのこだわり」と何が違うのだろうか。それは、エステルさんの話の中に何度も登場する「ちゃんと自分の言いたいこと、話したいこと、表したい」「人に伝えたくて」「アイデアを相手に伝えたい」などの発言から、表現への欲求の有無ではないかと考えた。表現への欲求があるときは、日本語の形への縛りから開放され、表現したい内容を表す形の探求への道を進んで選んでいたことが言えるのではないだろうか。

3. 結論：自分を探る世界が自分の教室

私は4Bという日本語クラスで、日本語の正しさに強いこだわりを持っていたエステルさんを対象に、彼女の日本語に接する姿勢の変化に興味を持ち、その理由を、クラスの特

徴である「書いた内容に焦点を当てて話し合う」「添削をしない」「日本語の間違いを評価しない」から考えていた。

しかし、対話を通して、書き直し続けていた内容とはエステルさん自身そのものであったこと、更に、クラスメンバーの関心も彼女の表現する彼女自身のことだった。私は、自分についての表現欲が正しい日本語へのこだわりから開放させ、自分の「変な日本語」への探求への道を開いていたことに驚かされた。

そして、「私」を考え続けると同時に、自分が考えた「私」にぴったりくる言葉を探り続けていく原動力となっていたのは、他人（クラスメンバー）によって気付かされる「私」の発見と他人に与える「私」の影響であった。そして、それはエステルさんの場合は、母語でもよく行っていたことであり、そのことが日本語でも実現できたことにクラスのメリットを感じていたことに気付かされた。

ここに来て私は、彼女の日本語を変えたものを次ぎのように考える。

誰かに確かな知識を教えてもらう場としての教室という壁を乗り越え、自分にしか知らない「私」だけではなく、他人が求めてくる「私」についても答えを考え続け、表現し続けたことで、「私」のことが少しずつ人に伝わっていたことをエステルさんは実感していた。その実感がエステルさんにとってはアイデンティティの実現であった。そして、その過程で使われた日本語は、自分を表すために自分があやつる道具として位置づけられたことから、「日本語が自分のものになった」とエステルさんは感じた。私はエステルさんとの対話を通して、日本語教師として自分が目指していきたいことがより明確になってきた気がしている。一人一人の学生が「考えにいく教室」から羽ばたいていき、世界を教室に考えて生きていける、そのような教室環境をつくっていきたいと思う。

4. おわりに

今回の「考えるための日本語」の授業は私にとっても「考えにいく教室」であった。エステルさんとの熱い対話を考える活動、自分のレポートをどうまとめるかを考える活動、グループのメンバーからのフィードバックをどうレポートに行かせるかを考える活動、そして、グループメンバーにどのようなフィードバックを与えたらいいかを考える活動、そういう活動であった。

このような活動を毎週重ねていくなかで、私が一番多く考えたことは、「考えるプロセスを共有する」ことの大切さと難しさであった。なぜなら、エステルさんの対話と、ビートルズのグループメンバーとの話し合いを通じて、自分が本当にプロセスを大事にしている

のか、プロダクトにより目を向けていた／いるのではないかと、何度も自問するようになったからだ。それまで私は授業の成果物より過程を大事にするというスタンスを保っていたと自負していた。しかし、今は、そのプロセスにも自分が思う正解の形があり、それを他人に、また、学生に求めているのではないかと、自分の考えを疑いはじめている。まだ答えは得ていないが、自分がいる教室が「世界を教室にする場」であると胸を張って言えるよう、今後も考え続けていきたい。

このように自分の教室を疑うきっかけを与えてくれたエステルさん、そして、ビートルズのグループメンバーのみなさん、本当にありがとうございました！

「自分」を整理する

山口恵美子

1 はじめに

人には誰にもいろいろな側面があって、それをいつも全部出して人と接しているわけではない。家族と入る時と友達といるとき、仕事をしているときと旅行をしているとき、それぞれに緊張感の有無やリラックス加減も当然違う。しかし、それでも自分のことを「私の趣味は〇〇なんです。」とか「私は▲▲な人間なので…」と言い表す人は少なくないと私は思う。自己紹介のときなどにこのような言い方で自分を表すことは多いのではないだろうか。このように自分を手短かに人に紹介するということが私には難しい。そのため、あなたがちあたっていないわけではない「趣味は散歩」をいつも使ってしまうのだ。

以前ある人と話していたときに「趣味は？と聞かれたら、ギターと答えることにしている。」といった人がいたのだが、この人も「ことにしている」というところからすると、「ギター」は唯一絶対ではないが一応あげておこうということなのだろう。私の場合はこの人とも同じではなく、自分がどのような人間かをきちんと整理していないために簡潔に言い表せないということなのだ。自分の部屋の中に無秩序に放り込んであるいろいろなものが整理されていないときに部屋の点検に来られたような、自己紹介とは私にとってそのようなものなのだ。

このような人間だから、月並みだがよく聞く「自分らしく生きたい」というフレーズを私は自分にうまく当てはめられない。確かにごちゃごちゃなのだが、ごちゃごちゃのまま生きたいと思っているわけではないからだ。「自分らしく生きたい」ばかりでなく「自分らしい日本語」というのもよく聞くフレーズも同様に、その時の「自分らしい」というのはいったいどのような自分を指しているのだろう。「自分らしい」という表現をほかの人はどのように考えているのだろう。その意見を聞くことが自分を整理するきっかけになるのではないかと思い、日本語教師をしている2人の女性と対話した。

2 動機文

自分らしさ

私は「好きなものは？」と聞かれると非常に困る。「これが好きだ」と言えるものがないからだ。文学作品を読むことは嫌いではないが、「大好きか」と言われるとそうでもない気がするし、映画も嫌いではないが同様に趣味と言えるほどではないと思っている。この「好き」という言葉と置き換えることはできないが、あえて言うなら自分にとって心が解放されるのは散歩しているときだ。どこと決めて決めないのだが、家の近所やその日の仕事の時間に余裕があれば職場の近く、旅行先でも何の変哲もない街中をふらりとする。もとも

と国内旅行でも海外に行っても名所を巡るのは誰かに付き合うときで、自分がリラックスできるのは一人で生活のにおいのする路地などをふらふらしているときなのだ。

このように散歩は確かに私の中では「心行く」時なのだが、その時の心の中はすっかり「いい」状態というわけではない。長い間決着をつけることなく棚上げされたままになっているものが不意にあらわれることもあるのだ。しかし、それは一生付き合っていかなければならない持病のようなものだと思っていて、その時の心は案外平らかなのだ。

この「散歩」を私は長い間自己紹介のときなどに、その場をやり過ごすために使ってきた。「私の趣味は〇〇です。」「私は▲▲な人間です。」のように自分を表すことができないからである。自分がどういう人間かをユニークにも的確にも伝えられそうにないし、ちゃんと言おうとすると、言ってくれないほうがいいと思われるような結末になるのだ。そうではあっても、確かに自分の中には自分を構成している要素はあるのだ。恐らくそれを整理する必要に迫られなかったためでもあろうし、初めて会う人に理解されようと思っていなかったともいえるかもしれない。

しかし、このアライバイのように使ってきた「散歩」が実は自分の一面であると共に、意外にも「私」という人間を理解するキーワードではないかと思う。「散歩」の時の心のあり様、自己紹介で「散歩」を持ち出すこと、それを説明しようとして却って混乱を招くといったことはそれこそ「私」そのものなのだ。能力の問題、キャパシティの問題も確かにあるが、自分の中には言い切りできないことが事実山積している。言い切るほうがわかりやすいのは当然だが、そうすることで表しきれずに取りこぼされた部分のあることが気になるのだ（取りこぼし部分を拾おうとして失敗することは多かった）。

このように自分を捉えている私は「自分らしく生きる」というフレーズに自分を当てはめることができない。現状の自分をここに当てはめると、恐らく世間でいうところのプラスのイメージにはならないからだ。「自分らしく生きる」に当てはめられない「自分」。これが私の「自分らしさ」なのだ。

3 対話

3.1 その1「すべてを含めて自分」

テーマ「自分らしさ」について対話したのは同僚のIさんである。彼女は日本語教師の経験が長く、国内のみならずオーストラリアや台湾でも教えた経験のある人である。何よりいろいろなことを整理して考えられる人であり、且つ勉強することが好きな人だと職場では思われている人である。私とは普段は仕事のことの打ち合わせで話すことがほとんどなのだが、そのときもいつも前向きだなと感じさせる人である。彼女が考える「自分らしさ」について話を聞くことにした。

日時：2011年6月20日（月）15：30～16：15

場所：都内某日本語学校進路指導室

※急なミーティングが入り、予定した時間より15分早く切り上げた。ここにはその一部を載せた。Iは対話相手、Yは私である。

Y：I先生は「自分らしい」をどんなふう考えているのかをお聞きしたいということです。私の場合は、中がぐちゃぐちゃでこれが自分らしいということがないんです。I先生はどい思いますか、ご自分の「自分らしい」を。

I：私が思っている私自身の「自分らしさ」。うーん、…そうですね。今、ちょっと散歩をしているときにね、散歩で何かを解決するとか、前向きではなくて何もしないで、という所で思い立ったことがあって。私って何か常にね結構「こうしたい」とか「こうあるべきだ」という理想的な自分というのが、これ結構小さい時からあるんですよ。たとえば、私の近くにすごく理想的な人がいて、「ああ、ああいうふうになれたらいいな。」とか、それを見ていて「ああしなきゃいけないな。」と常におもってるんだけど、常にそうできない自分があるんですよ。

Y：うーん、そう？（イメージが違っていたため疑う感じ）

I：あるんですよ。でも、他人には理想に近い自分、自分に見られたい自分がいて、ま、一応努力はしたり、うわべだけかもしれないけれども、なんか努力はしたりしてるんだけど…しばらく続けるとそれがまた戻ってしまったり、またちょっとだらけた自分っていうのが常にあるって、その結構繰り返しのところがあるって、…でも昔に比べたら戻ってるんだけどゼロにまで戻ってるんじゃないって、少し上に上がっている自分があるかなあ、ま、それでもいいかなあっていうのを今感じたのね。なんか、ごめんなさい、あんまりまとまってなくて…。

Y：いえいえ。

I：でも、まあそれが「自分らしさ」かどうかはわからないけど、私かなっていう…多分ねえ、たとえば、今日から、よくタバコを今日限りでやめようって思うような感じで、今日からちょっと怠惰な生活じゃなくて、こういうところに努力しようって思うんだけど、三日坊主とはいわないんだけど、結構続かなくて、でもなんかそういうことの中の一つでも一歩次の段階に行ったときにステップとして上がっている自分があればいいかなって思うようになった、50過ぎて。

Y：そこにはあの、理想があって、そこに向かっていくある時期があるんですよ。で、それがそうじゃない、もとに戻りそうになってる時にも、こうなってる（手で上昇を表している）、このときには頑張ってる自分がいて、このときにも（手で下降を表している）ある程度は頑張ってる自分がいるということ？

I：そうそう。少しはねいるの。まったくゼロには戻らないし、頑張んなきゃなあって思いながら、すごい頑張ってる時があって、またこう（下降表現）で、その繰り返しかえしだになって、実はね結構思ってた…（中略）でも、何か自分の場所を、こう、いなきゃいけない場所が決まると、ま、自分がやらなくても、今の職場もそうだけど、ま、周りから要求

されるものとか、こう、しなきゃいけないことというのがあるから、おのずと少しずつはアップしていくんですね、その場に身を置くと。まあ、そこにちょっと甘んじてるところはあるんだけど、…うーん、なんかすっごい、昔はいろんな、その理想像みたいなのがあって、それを常に追い求めていて、年とってくるとそれがまた多少理想が小さくなる、あ、小さくなるは言わないか。ま、そんな大きなことじゃなくなったりとか、するんだけど、ま、常にそうやって繰り返す自分っていうのがあるなあって感じ。

Y：それは「自分らしい」とイコールですか？

I：それが自分、「自分らしさ」っていうより自分かな。

(中略)

I：本来の自分。私も本来の自分って言うのがあって、まあ、理想的な自分というのがあるって、それをめざす、それを一生懸命めざしてるよっていうのも自分だから。

Y：ああ。

I：ね。本来もいるんだけど、やっぱり人間ってこうありたいとか、常にそうとかあるわけだから、めざすものがあるってめざしてるんだけど、戻って、まためざしてるのも私だから。

Y：めざすのも私。

I：そのすべてを含めて私らしさ、私らしいということだから。

この対話の中でIさんは自分というものを頑張っているのも自分、力を抜いて戻っていくのも自分であり、そのすべてを含めて「私らしさ」と締めくくっている。すっごく頑張っているわけではない自分も少しは上に向かっていこうとしているし、戻ってしまったと感じても、そこはゼロ地点ではないと判断している。そして昔とは違うがやはり理想を持っていて、その方向に自分を向けていることを自覚している。

私は自分の問題を、すぐに解決できないためにずっと抱えていたが、それを自分を構成する要素のうちの一つと考えずに、それだけに目をむけていた。実は未解決の問題があること自体が問題なのではなく、その状態をどう捉え、長期であってもどう解決またはどう付き合っていくかを考えることが重要なのである。自分を客観的に捉えることがなかなかできずに、自分について認めるべきところはあっても、そうあって当然と考え、プラス評価をつけられずにいたことに改めて気づいた。

3.2 その2「今の私、それこそ自分」

偶然だったがUさんと会う機会を得て、対話をお願いしたところ快く引き受けてくれた。彼女はIさん同様国内外での日本語教師経験を持つ人で、これまで話した印象では相手の意見に何でも「そうですねえ」などという人とは違い、はっきりものを言う人である。しかし、それが、非常に心地よく、またわかりやすいのである。私の中の未整理のものから、取って置くものと捨てるものとをどう分類するのか興味深かったので、対話することにし

た。Uさんは日本語教育研究科の大学院生。

日時：2011年6月24日（金）16：40～18：50

場所：カフェ

※はじめは彼女の研究について話していたため、この時間すべてにわたって私のテーマについて対話したわけではなく、一部分を切り取ったものである。Uは対話相手、Yは私である。

U：「自分らしい」か。…今ここで今ここにいる私が、そのものが自分らしいのであってでもその私はいろんな制約を受けて今ここに私としているので、…だから、その理想としての、なんか、もし「自分らしく生きたい」というフレーズがあったとして、それは結局今ここにある私、制約を受けた、いろいろな制約の中で判断してやっている私でしかないかなっていう気がする。

Y：じゃあ、「自分らしく生きたい」という言葉の「自分らしく」って、多分制約をうけてな状態を想定して言ってる？

U：そしたら社会から放り投げられている人でしょ？社会の中にいるってこと自体が既に制約よね。（中略）なので、その「自分らしさ」っていうのを、社会の制約外で「自分らしさ」っていったって、それは理想の世界であって、今の現実の社会から放りだされている人、なのかなっていう気がするのよね。

Y：じゃあ、「自分らしく生きたい」というその言葉って、全然意味がない？

U：意味がないわけではないかもしれないけれども、「自分らしさ」っていつてるそれって何？っていうふうに私は聞きたい。今ここにある私、あるがままの私、がそれこそ「自分らしい」としかいいようがないんじゃないかと思う。

Y：じゃあそういう人って、なんでそういうふうに言ってるんだと思う？「自分らしくいきたい」ってよく聞くじゃない。

U：だからある程度社会の制約から外れた、目の前にある一番煩わしい制約だけを取った、都合のいい社会、制約のある社会、もしかしたらその人にとっては…じゃあ、そこを取ったって、次もある、またその次もあって、このように社会は誠也君も中でしか、社会そのものがね、そもそもそうなので、私はそう思っているんで、だからこの1枚バリアをかぶって、あるいははずしたところで、じゃああなたらしさっていうのがほんとに広がったら出てくるの？っていつても、やっぱりここにいるこの人しかないわけじゃん。

Y：って言うことは「自分らしく生きたい」と言うのは一つの逃げ口上？

U：か、あるいは理想的な、その、その制約がなかったらいいのに…だから羽があったら飛んであなたのところに行くのにみたいな、そのぐらいの何か非現実的なことを、もしかしたら思い浮かべて逃避したいとか、理想郷に行きたいとか、もしかしたらそういうふうなところまでいってしまう考えかもしれないなと私は思う。

(中略)

U：私の「自分らしさ」は今のありのままの私でしかないって言ったよね。その先とかその前とかなくて、今の私、それこそ。もちろん変化するかもしれない、前の私と明日の私は違うかもしれないけど、そのときそう見えたそれしかない。だからあなたも今の自分をそういうふうに、ただそれに対して（これは問題を抱えたままにいること）、問題があるからといってアクションするかしないかではなくて、いまどういう状態に置かれているかっていうのもなんとなく認識してる感じ？

Y：だから「自分らしく生きたい」っていうのと、ピッタリこないなって。「自分らしく生きたい」っていうときの「自分らしく」って何かなって聞いたわけ。

U：それだったら私もそんなに合わないっていったらおかしいけど、でも今あるがままの私がそうなので、それこそが「生きたい」っていうよりも「生きている」と、「自分らしく生きている」というんだったら、まあそうなのかもしれない。もしかしたら今のこの状態を続ける、あるいはそうであると認識しているこの自分らしさを、また明日も同じように続けるっていう意味で「自分らしく生きる」「生きたい」ということにはなるのかもしれない。でもそれが別に理想とする何かの姿という意味の自分らしさではなくて、ありのままの自分、今あるこの私が明日もあるという意味での「生きたい」。

この対話の中でUさんは、自分というのは「その前でも後でもない、今の自分が自分なのだ」という。理想的な、非現実的な中にある自分ではなく、制約を受けた中で生きる、今の自分、これこそが自分であると。人が生きる社会には制約があって当然。だからこそ「自分らしく生きたい」というフレーズには現実逃避のにおいを感じている。私の問題についても、問題解決をするかしないかではなく、問題を抱えている自分、それこそが自分であって、アクションを起こすかどうかは別の問題だという。この対話を通して私は、彼女が自分自身を客観的に（自分なりに）分析し、その上でよい方向に進んでいくためにはどうするべきかを考える、その課題として自分自身を捉えているのだと思った。

4 結論

先の対話を終えてわかったことは、私が「制約のある社会」の中で無理をして生きており、問題解決もせずぼんやり散歩をしている自分は無理をしておらず、このような弛緩しきった自分が本当の自分なのだとい面的な捉え方をしていたということである。それに対して対話をした相手二人には共通する点があった。第一には自分自身を客観的に眺め、短所ばかりでなくよいところにもちゃんと目をむけ、トータルで評価している点である。第二に自分の未来に希望を持って、そこに向かって努力している点である。第三には他者との関係を自分の成長と結びつけて捉えているという点である。

この対話を通してわたしは、自分の問題点を問題点として認めることがマイナスではなく、それを課題として捉えることでよりよい未来に繋げることができるということに思い

至った。二人の日本語教師と対話した後心が晴れる想いがしたのは、まだ何も決まってい
ない未使用の時間、つまり私自身が作っていただけるこれからの時間がわたしにも用意されて
いると感じることができたからではないか。

自分が他の誰でもない自分であれば、「自分らしく生きたい」などという誰かが作ったフ
レーズに当てはまらなくても当たり前であった。自分があるがままに表せるのは自分であ
るはずである。そのあるがままの自分をきちんと分析すれば、自分の能力や傾向が明らか
になり、そこから心豊かに生きる途も見えてくるはずである。これまで私が心を開ける他
者は学生時代の友人であり、かなり長い付き合いがあるからこそ他者として自分の中に位
置づけられた。が、日研に入って1年。周りに対する自分の目が以前とは少し変わってい
ると感じている。ここには私がこれまで遭ったことのない空気を持った人がいる。そこに
自分自身が惹かれるものを感じている。ここでの出会いを好機として私は自分を変えてい
けたらと思っている。自分を変えることは簡単ではないが、それでも充実した未来に向け
て、その方角に向きなおした私。それが今の自分である。

5 おわりに

この「考えるための日本語」を受講したのは2度目である。1度目は日本語教育研究科
の実習生として参加した。基本的な流れは前回と同じであるが、参加するメンバーが違え
ば同じ自分であっても考えることは同じではないし、また1度経験し、それなりに学習し
た自分は前の期に参加した時の自分ではない。ことに今回の自分のテーマのきっかけは前
の期の初めにも触れた「散歩」であった。それを再度持ち出したのは、「なんとなく散歩を
持ち出す自分」がどのような人間なのか、整理して把握し、「これからの自分」を考えか
ったからである。

対話相手の2人は、実に前向きな生き方をしている人物であるが、自信を含めた人間の
捉え方が客観的であると同時に懐の深さを感じさせる人物でもあった。しかし、わたしの
結論へのプロセスにはこの2人以外にも同じグループのメンバーが関わっている。自分の
書いたものへのコメントばかりでなく、彼ら書いたものや授業内で語ったこと、BBS
に流されたメッセージなどを含めた、今回の活動全般が結論への道を作っている。わたし
はこの活動をする中で、また一つ新しい自分を発見した思いである。

あとがき

この授業において我々は、自分の「過去・現在・未来を結ぶテーマ」を発見し、グループ活動や対話活動を通じ、長い時間をかけてそのことについて話し合ってきた。そして、その中で当初の目標であった、「わたしのことば」を用いて皆それぞれが自らの意見を語る事が出来たのではないかと思う。

そもそも、「わたしのことば」とはいかなるものであったのか？ レポートの作成が終了した今、そのことについて振り返ってみたいと思う。

初めに思いつくのが、「客観」に対する「主観」と言う意味での「わたしのことば」である。本講義では、ディベートなどでよく使われるような抽象的、あるいは一般的な事柄について話し合うのではなく、常に自分の経験を基に、自らが見たり聞いたりしたことについて具体的に話し合う事が求められた。したがって、グループのメンバーは皆、自分自身をもっとも関心のあるテーマを選択し、それらが自らに関する切実な問題であるがゆえ、より活発に熱意をもって議論を重ねる事が出来たのではないかと思う。こうした意味ではチームのメンバーそれぞれが「わたしのことば」で語る事が出来たとと言えるであろう。

次に、「他者」と比較した『わたし』の「ことば」というとらえ方が考えられる。授業は、グループでの会話を中心に行われた。グループのメンバーが皆初対面であったということもあり、最初のうちはお互いの考えや背景を確認することから始まった。しかし、回を重ねるごとにメンバーそれぞれがお互いの事を良く知り、考え方を共有できるようになったため、議論がより積極的になり、内容も深まっていったように感じた。その過程において、各々がただ自分の意見を発表するのではなく、まだバックグラウンドを共有していない相手の事を考え、分かりやすく、少しでも相手が理解しやすいように、「わたしのことば」で語る事が求められた。このことはレポートの中心部分である対話活動においてもそのまま当てはまる。たとえ対話相手に知人を選択したとしても、こうした対話を行うのは初めての経験であろうから、そこにおいてもいかに自分の意見を相手に分かり易く伝えるか、すなわち「わたしのことば」で語る事が求められた。

このようにして語られた「わたしのことば」は、他のメンバーにとっては他者の貴重な意見であり、自分の「過去・現在・未来を結ぶテーマ」について考えるにあたって、最も重要な、欠かすことのできない部分でもある。なぜなら、本レポートを作成するにあたって、自分ひとりだけでは決して思いつかないような他者の考えに触れて初めて、自分の考えが深まっていき、「過去・現在・未来を結ぶテーマ」が形作られていくからである。わたしの「わたしのことば」だけでなく、メンバーそれぞれの「わたしのことば」が必要不可欠なのである。このことを、授業を通じて身を持って体験することが出来たのではないかと思う。

泉山広樹

著者紹介

チーム・ビートルズ

さき、まさこ、ひろき、ひろのり、チャン、山口の 6 人からなる「考えるための日本語」のグループです。13 週にわたり、熱い議論を交わしました。

寺田早希（てらだ・さき）

国際教養学部 4 年華の留年生！

「おしゃべり大好きなのでこの授業を取りましたが、大正解でした。チームビートルズの皆さん、どうもありがとうございました！今度飲みたいですよ（`・v・´）」

中野正子（なかの・まさこ）

教育学部国語国文学科 4 年。

「最近抹茶味のお菓子やアイスにはまっています♪」

泉山広樹（いずみやま・ひろき）

商学部 5 年。

「レポートに書いてあるように、サッカーと音楽が趣味ですよ♪」

松本裕典（まつもと・ひろのり）

大学院日本語教育研究科修士 1 年。

「現職の浜松市長が前職の市長に引き続き、ブラジルから勲章をもらいました。そんな浜松とブラジルが大好きです。」

張珍華（チャン・ジンハ）

日本語教育研究科大学院生。

「対話する日本語教室の教師を目指している韓国人です。チームビートルズのみなさんとの 13 週間、本当に楽しかったです。ありがとうございました☆」

山口恵美子（やまぐち・えみこ）

日本語教育研究科修士 2 年山口恵美子です。

「私は本編に書いたような人間です。」

「わたしのことば」たち
—もしもチーム・ビートルズが対話活動をしてみたら—

編集 : チーム・ビートルズ
発行日 : 2011 年 8 月 10 日
発行 : チーム・ビートルズ
Member : 寺田早希・中野正子・泉山広樹・松本裕典・張珍華・山口恵美子

